病とその文学

――夏目漱石の修善寺大患――

黒沢勉

目次

一　はじめに
二　大患に立ち会った人々の記録
三　日記―明治四十三年八月六日から明治四十四年一月二十一日まで
四　大患直後の漢詩
五　「思い出す事など」

一　はじめに

きわめて素朴な捉え方であるが、健康で心身の苦しみを味わわない人間と、宿痾とも呼ぶべき病を持ち、たえず心身の苦しみに直面せざるをえない人間とは、その生に対する意識に大きな隔たりがあると考えられる。容易には癒しがたい病を体内に潜めながら狭い病室を己が世界とし、不安と闘っている人間と、若さと健康にあふれて広い世界で自由に行動する人間とを頭に思い浮かべるなら、両者の意識に大きな隔たりのあることは容易に察しがつこう。健康は、確かに誰にとっても望ましいものであり、時として、それは幸福の条件の一つ、それもきわめて重要な条件の一つに数えあげられる。だから私達は、挨拶としてすら「お元気ですか」と問い「お身体に気をつけて」と祈るのである。なるほどそれは一種の符丁のようなものであり、ほとんど実質的な意味を持たないことも多いのだが、もし一度、病にでも犯されようものなら、それを癒さぬうちは、私達は十分に活動することはできない。絶えざる気がかりの種を心の中にかかえてしまうことになる。健康だと自分を感じている人間は、多くの場合、その健康であるということが、どれほど大切なものであるかを忘れがちである。私は何もここで健康の有難さについて説教を始めようというのではない。単純化して言えば、世の中には、「健康人（時）」と「不健康人（時）」という二つの類型があり、どんなに想像力を働かせようと、想像することのできない意識の深い断絶がそこにはある、と言いたいのである。我が身つねって人の痛さを知れ、と言うが、逆に言えば、「つねって」みなければ人の痛みを知ることはできないということも示していよう。

「痛み」は、頭痛、腹痛など肉体的なものであり感覚の苦しみである。感覚の苦しみは、それが激しいと何一つ手につかないし、考えることさえもできない。絶えざる激しい痛みは、人から思考力を奪う。そのような「痛

み」とは別に、その肉体の継続的な苦痛は、大きな不安、つきつめて言えば「死」への意識となって、人に考えることを余儀なくさせる。多くの場合それは不安や恐れという感情と結びついた精神的な葛藤である。病の究極は「死」であり、死に至る可能性を秘めた病は人間を大きな不安に陥れる。これは人間にとって最大の試練と言わなくてはなるまい。それは「苦痛」ではなくして「苦悩」と言うこともできる。医療に従事する者は、患者の「苦痛」に目をやらなくてはならないが、時として、その「苦悩」に直面し、たじろぐことも多いのではなかろうか。

文学に関心を抱き、ささやかな論文を幾つか書いたりもしてきた私が、そのテーマとして作家の生と死の意識を探りたい、と考えるようになったのは、病の詩人、村上昭夫を論じた時に始まる。その内容については別稿に譲るとして、病に犯され、死に直面することは、作品創造の重大な契機になりうるし、又作品に深みを与えるということだけは指摘しておきたい。生と死という人間ギリギリの危機の体験がそうさせるのだろう、と言えばあまりにも単純である。そこには、その人それぞれが経験してきたこと、学んできたことの根本が問われ、人生観、人間観の根底が問われるらしい（テーマの追求の始まった今、一種の予告として、「らしい」と言っておく）。おそらく文学の世界から病や死の意識の窺われるものを取り除いたら、文学史はかなり貧弱なものになってしまうだろう。「万葉集」がその和歌を挽歌・相聞・雑の三つに部立していることはすでに示唆的である。別れ――その極点にある死別、出会い――その極点にある愛は、その他のものを「雑」として一括して括ったものと並ぶ重要なテーマであったのである。それは必ずしも挽歌――広げて言って死を見つめる文学が主流をなした、ということではないが、光が影を生むように、生そのものの影となって、愛やその他もろもろのテーマの深い所に見え隠れしているのではなかろうか。

病と言い、死と言い、確かに暗い重い話題ではある。そして現代文明は、この人間の避け得ぬ宿命に目をそら

し、人々の目から隔離する方向に向かっている。日本のことに限って言えば、かつてない豊かな長寿社会を迎え、死亡率の低下があり、病や死はほとんどが病院という日常から離れた特殊な環境の中で迎えるものとなっている。従ってたとえば戦前の人と比べてさえ、現代の私達は死を目撃する機会がはるかに少なくなっている。特に若者にとって「死」はまだまだ先の出来事として、一度も考える機会をもたないままに過ごしている。かつて青年達の命をおびやかした戦争による死というものがない、また死病とされた結核がもはや恐ろしいものでなくなってきている。かてて加えて現代の資本主義社会が、どこまでも快適で便利な明るいイメージをばらまいている。健康な青年がキレイであることに心掛け――フケツ（不潔）という言葉が差別語として、いじめに使われていることは象徴的である――病や死は全く無縁のものと感じたとて何ら不思議はないだろう。二十才前後の若者の交通事故死が今日大きな社会問題となっているが、彼らは恐らく一度も「死」ということを考えないまま、あたら青春にして散り果てているのである。

「死」を考えないことは「生」を考えないことであり「いのち」を考えないことでもある。きらびやかな物質文明の魔力に踊らされて、はかなく生を終えるその姿は「生酔夢死」という言葉を思い出させるに充分である。何も青年とだけ限ったわけではない。これは多忙な現代人に多かれ少なかれ共通して見られる傾向と言って良いのではなかろうか。「死」を考えることは、「生」を考え、自分自身の人生を見つめ生き方を見つめる一つの契機ともなるはずである。文学は自分が直接には体験できないことを間接的に経験するものだという。だとするなら私達も生と死にかかわる文学に親しむことによって、間接的に生と死を経験しそこから自分の生き方を考える養分を汲みとることもできるのではなかろうか。文学の功徳の一つがそこにもあると思われる。

ともあれ、先入観を捨てて、できるだけ素直に、謙虚になって、作家が生と死をめぐって苦悩した、その足跡を

たどってみたいと思う。ここで夏目漱石をとり上げるのは、漱石も病める作家であり又、病めることによって、その作品世界を豊かにした作家だと考えるからである。一言で言えば私は、漱石の文学を「病者の文学」と考える。後で述べることになるが、「生よりも死を尊い」と考え、若い頃から強い厭世観に襲われた漱石には、生に対する明るい建設的な意識が乏しかった。そして年老いてその作品が円熟するにつれますますその厭世観は深められ、死への深い憧憬を抱きつつその生を終えたと思う。一般的に言って楽天的に明日を夢みて生きている「健康な」生活からすぐれた芸術が生まれるわけではない。むしろ多くの優れた芸術作品が何らかの病のうちに創られていると言っても過言ではあるまい。漱石の文学もそのような病者の文学の一つとして挙げることができる。以下に述べるのは、人間、夏目金之助の病の経験がいかに文学として形象化され、思想として深められていったかの、荒削りなデッサンであり、講義ノートとして準備したものである。漱石について、これまで深く考えたわけでもなく、長年読み続けてきた研究者とも言えぬ者の、気ままな考察であり無知、誤解もあろう。又私自身の考えとて断わるまでもなく、現在時点での一つの解釈にすぎない。今後読み続け又、関心ある人と話しあって更に考察を深めていかねばならぬものでもある。その意味で本稿はごくごくささやかな足がかりにすぎない。

二　大患に立ち会った人々の記録

漱石がいわゆる「修善寺大患」として知られる病に倒れたのは、明治四十三年八月二十四日、四十四才の時のことであった。大患と言えば、何となく、生きて苦しんだ、という風に考えられ易いが、これは文字通り死の経験そのものであった。少なくとも漱石は、これを「死」と捉え、その自らの体験を通して生と死についての思索を深めているのである。その点から言えば、これは瀕死体験として捉えるべき特異な体験である。そしてここで注目すべきは、この瀕死体験を迎える迄、漱石に死の意識は全くなく、経験は、どこまでも体験としてただ苦しみに苦しみ、そして「突如」意識を失ったということである。重い病に苦しむことは、肉体的に考えれば死の前触れであり、その苦しみと不安の中から生と死について考えることも多いであろう。しかし漱石は、短い日数ではあるが、ただただ苦しみ、そして、それは「突然」やってきたのである。なぜこのような形で「死」を体験することになったか。

それは胃潰瘍という病気のためである。戦前における結核、そして現代の癌のような病は、「死病」と見なされ、その患者は多かれ少なかれ、死の影のもとに生きることを余儀なくされがちである。それに対して胃潰瘍は直接には死を意識させない病である。明治時代のことであるから、胃潰瘍で亡くなった人は現代とは比較にならない位多かったかもしれないが、それにしても、「死病」という捉え方は一般的ではなかったろう。癌や戦前の結核と違って本人の努力にもかかわらずどんどん進行することも多い病に比べ、胃潰瘍は胃が「弱い」という形で意識され、食生活をはじめとする生活の改善などによってある程度癒るとされる。胃潰瘍を患っていた漱石は、それを死と結びつけて考えることはなかったようである。しかも、長与病院に入院し、ある程度、よくなって退院した矢先のことである。大吐血の前、二度にわたる吐血があったにもかかわらず、「死」は全く予想外の思いがけぬ経験であっ

た。修善寺大患を通して漱石は、生と死の問題に深く思いを潜め、それが「思い出す事など」という随筆となって結晶するのだが、そこに見られる漱石の死生観の特色を言うなら、それは、「死」を経験した者のそれである、ということである。この点、たとえば、ガンのために死を予告された人々の死生観との大きな違いがある。漱石は、一度死を経験し、病の癒えていく過程の中で、「思い出す事など」を書き、生と死について思索を深めるのである。激しい苦痛のさ中、人は文字通り病と戦う肉体そのものと化すだろう。そこには「思索」のゆとりはない。修善寺において八月二十四日まで漱石は、苦しみ通した。そして一度「死に」「生き還った」のである。それは奇跡的な生還であった。その生還の意味は大きい。漱石その人にとっては、もちろんのこと、近代文学史にとって大きいと言わなくてはなるまい。生還以後の作品「彼岸過迄」「行人」「こころ」「道草」「明暗」のない漱石文学とは何であるか、考えてみるまでもなく明らかであろう。

しかし、ことは、それだけにとどまらない。人間漱石にとって、又は作家漱石にとってこの体験自体がどのような意味をもったのか、あるいはもたなかったのか。その点に関して、これ迄、様々な議論が展開されている。いわゆる「則天去私」ということも、これにかかわる問題である。近年、死について、又瀕死体験について多くの書物が書かれている。河合隼雄の「宗教と科学の接点」はその一つであり、ユング心理学の視点から宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を分析している。人間のたましいにとって、いかに死、あるいは瀕死体験が重要な意味をもつのかを河合は、その中で語っている。又、レイモンド・A・ムーディーは「かいまみた死後の世界」において瀕死体験をもった人々の経験を記録し、彼らが、その体験を通して多くの場合、死を恐れなくなること、深いやさしさを持つようになる、といったことが述べられている。又マイクル・B・セイボムの「あの世からの帰還」はその本に刺激されて医師が書いたものであるが、魂の実在について考えさせられる深い神秘と謎を秘めたきわめて印象的な本であっ

た。そのような書物に刺激されながら、漱石の瀕死体験を考察してみるとどのようなことが言えるのだろうか。

漱石の弟子であった小宮豊隆や日本文芸学の岡崎義恵などは、漱石が晩年にたどりついた境地を「則天去私」として捉え、ここに漱石文学の理念、思想を見ようとした。それは、森鷗外の「諦念」と対比され、きわめて図式的もしくは観念的に、一つの文芸理念として、深い理解のないままに世にまかり通っている。これに対して激しい反論を唱えたのは、当の漱石の次男、夏目伸六である。伸六は次のように書いている。

『修善寺の大患以後、父が唱えた則天去私などと云う言葉から、父がこの大患に依って、真に生れ変わったと云う様な事を、如何にも深刻気に論ずる人があるが、そこには、特殊な体験から生れた人間当然の成長があったばかりで、決してそれ程大袈裟な変化が、父の内部に起ったなどと考えるのは、寧ろ笑止な話である。勿論大患以後のある期間は、父の生涯中で最も美しい一時期を画するもので、父はこの時程、自分の生命に対して、心からの感謝の念を抱き得た事は一度もなく、強いては、自分を取りまく凡てのものに対して、この時程、同じ深い感謝の念を以て接し得た事も、未だ曽てなかった筈である。父自身も、この心境が能うる限り続いてくれる事を、心の底から願いながら、日一日とそれの薄れて行く状態を、深い哀惜を以て嘆じて居るのである。要するに、若いころから禅に深い関心を寄せながら、遂に生涯悟入の境地に到達し得なかった父として、悟り得ぬ為により一層、〃則天去私〃を心に念じ、自分とはかけ離れた若い禅僧の心境にも、自づと憧憬に似た淡い共感を覚えたのであろう。』

「漱石の思い出」の解説として書かれたものだが、この解説自体、作家、評論家の解説とは全く異なった子の立場からみた漱石観が記されており興味深いものがある。伸六は漱石四十三才の時の子であり、大患の時はわずか一才、六才にして父を失っているのだから、この解釈自体成人して、父漱石の作品を解釈したものであり、そのま

ま、漱石の姿を伝えるものではないだろう。この解説の中で、幼少の時、公衆の面前で、土間にたたきつけられ「手に持ったステッキで、打つ、蹴る、なぐるのすさまじい打擲(ちょうちゃく)」が加えられたこと、そして、そのような振舞いを自分にした父漱石が母に対してどんな態度で臨んだのか容易に想像がつく、と語っている。そこには父を憎み、母と一体となったエディプスコンプレックス的な情念が基本にある。この解説の中で述べていることを簡単に言えば、①修善寺の大患は、漱石の生涯中、最も幸福な、感謝に満ちた心境をもたらしたこと、②しかしそれは一時的のことであり、その時の心境は日に日に薄れていったのであって、これを契機として「則天去私」などという悟達の境地に至りえた、などということは全く考えられないということ、③「則天去私」とは、狂気に犯された漱石にあって、自分とかけ離れているがゆえの憧憬的な理想であったろう、この三点に尽きる。このような肉親の解釈をも、一つの問題提起として、漱石その人にとって修善寺大患がどのような意味をもつものであったかを考えていきたい。

まず、初めに、大患のクライマックスとも言うべき八月二十四日に至るまでの流れを整理しておこう。

漱石は明治四十三年三月一日から六月十二日まで、朝日新聞に「門」を連載した。この間、三月には五女ひな子が生まれたものの、執筆中から胃が悪く、脱稿後、長与病院でみてもらったところ、便の中に出血もあり、胃潰瘍と診断される。六月十八日、同病院に入院し、具合もよくなったので、七月三十一日に退院する。その矢先、門弟の松根東洋城から北白川宮様のお附きで修善寺に来ているから、静養にこないかという誘いがあった。東洋城とゆっくり俳句でも作りながら静養しようと家を出発したのが、八月六日である。ところが着いて間もなく八日から胃痙攣に悩まされ、十二日には胆汁や酸液を一升も吐き、十七日には「熊の肝のような」血の塊を吐き、さらに十九日にも吐血というさんざんの状態でついに二十四日を迎えたのである。この間十八日には、東洋城は漱石の様態を心配し東京へ連絡をとったところ朝日新聞の坂元雪鳥、長与病院の森成麟造医師が来ることになった。森成医師は

二十一日には帰京の予定だったが、病状が回復しないため、修善寺にそのままとどまる。長与院長より「その地にとどまり看護に手を尽すべし」との電報があったからでもある。東洋城は、又漱石の家に電報を打ち、妻が駆けつける。妻は、多忙な森成医師が帰京しようとするのに対して、修善寺に来る前に旅行していいかどうか伺い、快諾を得て来たのに、こうなったのは病院の責任もあると抗議し、困った森成医師が病院へ電報を打ったところ、先程のような電報があったのである。さらにその上、副院長の杉本東造医師まで診察に寄こす、ということであった。その杉本副院長が二十四日の午後四時に到着、診察の後、夜八時にそれは起こった。結局二人の医師、妻、社員の雪鳥四人が、それに立ち合うことになる。それにしても東京から離れた山間の温泉地に、妻は当然のこととして二人の医師、社員の手厚い看護を受けた漱石は、破格といってよい特別の待遇をもって遇せられていることが知られる。同じことは、八月二十五日以降、容態を聞きつけて訪れた数々の人、その顔ぶれによっても感ぜられる。漱石の社会的な地位、信望がいかに高かったかの証拠であろう。大患の危機をあやうく脱したという背景には、このような漱石の社会的信用度もあったことを忘れてはならない。奇跡の生還には、人力も深く関わっていた。漱石は決して、今死んではならぬ人だったのである。

以下、大患に立ちあった人の文章を幾つか紹介してみたい。漱石が、内面の問題としてこの大患をどう受けとめたかを知る前に、まず、この事故――病気とは言え、突然の大内出血は一つの事故にも等しいだろう――が、いかなる経緯で起こったのか、観察した人々の記録を見ておこう。

A、妻、夏目鏡子の記録から（「漱石の思い出」による）

『夕方牛乳を少しばかり呑みましたが、大変気持の悪い様子でした。そこへ杉本さんがお見えになって診察がすみます。やれやれと思って、お医者さん達があちらの部屋に退いて、一風呂浴びて夕食でもたべようとなさいま

す間、私が側へよって話でもしようと近づきまして、あんまりいやな顔をしているものですから、

「気持悪いですか」とたづねますと、いきなりすげなく、

「彼方へいっててくれ」

と申します途端に、ゲエーッといういやな音を立てます。様子が只事でありません。隣室に高田早苗さんがお子様方をお連れになっていらしていましたが、そこへ女中さんがきて何やら話をしています。ともかく場合が場合ですからなりふりをかまってはおられません。急にその女中さんを呼びまして、今行かれたばかりのお医者さんたちを呼んでもらおうとしました。とまたゲエーッと不気味な音を立てたと思うと、何ともかんとも言えないいやな顔をして、目をつるし上げてしまいました。と鼻からぽたぽた血が滴ります。私はやっきになって通りがかりの番頭を呼んで医者を招ばせます。お医者さんたちは中庭を隔てて向うの部屋にいるのですから、その後姿などがちらちら見えているのです。その間に夏目は私につかまって夥しい血を吐きます。私の着物は胸から下一面に紅に染まりました。

そこへ皆さんが駆けつけておいでになります。顔の色がなくなって、目は上がったっ切り、脈がないという始末。それカンフル注射だ、注射器はどうしたというあわてかたです。注射を続け様に十幾本かを打ちますが依然としてよろしくない。では食塩注射だということになりましたが、生憎と森成さんも杉本さんもその注射器を持ち合わされない。ようやく土地のお医者から借りてきたものの、それがこわれているという始末。こわれたって針さえあればいい、灌腸器の何とかをどうしてと、上を下への騒動です。一晩中こわれかけた注射器を武器にして、お医者さんと病気とが闘われたわけですが、とうとういいあんばいに脈も出てきて、危いところで一命を取りとめることができました。

後で病人にききますと、そんなに騒がれているにも拘らず、自分は血を吐いてしまったら、実にもやもやしていた胸がからりと晴れわたった気持になってせいせいしたそうです。そうして皆があわてて話をしているのがきこえるが、ただ自分でも相手になって口をきく気がしないだけのこと、こうなった上は子供を呼ばなければいけないでしょうなどというのがきこえるので、急にぽかんと目をあけて、いや呼ぶには当らないよと言って皆を驚かしたり安心させたりしたものだが、病人なんてものは横著なものだと述懐していたことがあります。

社の坂元雪鳥さんが、この危篤の状態に驚いて、各方面へ電報を打ってられる。鉛筆か筆かを握って電報用紙に向いながら、奥さんしっかりしてらっしゃい、しっかりしてらっしゃいと、私がこの上気が転倒でもしてはと思われるものかしきりにはげましてくれられたのですが、私どころか御自分の手がぶるぶる震えて、どうしても電報の字が書けないのでした。

社から主筆の池邊さんが来られる。そのほかいろいろな方々がお見舞いにかけつけてくださいましたが、この容態なものですから、会って戴くわけに参りません。

ところがその日はどうやら落ちついたものの、翌日になると杉本さんが院長の長与さんが重態でどうしても帰らなければならないとおっしゃいます。もう少しいて戴きたいのは山々ですが、それもいたし方がございません。かえり際に、吐血で病人を殺すのはまったく医者の不注意なんですから、森成にもよく言って万端遺漏のないようにいたさせますが、しかし御覧のとおりのこの御重態のことですから、もう一度大出血がないとも限りません。万々一それがあれば絶望だと思って戴かなければなりませんというお話。そこで池邊さんにもそのことをお話して、ここ二、三日が大警戒を要する時だとあって、東京から看護婦を呼んだりして、手当てに手落ちのないようにつとめました。

いいあんばいに吐血はそれきりとまりました。が手足は動きません。これが八月二十四日の出来事であります。』

B、朝日新聞社、社員坂元雪鳥の記録から（「修善寺日記」『国学』昭和十三年七月号――ただし、岩波文庫「思い出す事など」の解説から引用する）

『（夫人が悲鳴をあげて呼ぶのでとんで行くと）先生は今しも唾壺（それは夫人が右手に先生を抱き左手に持っておられた）に一杯血を吐いておられる。真蒼になった先生は眼を瞠〔原、瞎〕いて瞳孔の散大したのが分かる。毛髪も髯も真黒に見える中に生々しい鮮血がダクダクと流れ出ている。予は直ぐ縁側から金盥を持ってきて唾壺と更えた。森成氏は既に注射の用意をしている。杉本氏はその便々たる腹を波立たせてシカと先生の手を握って先生の顔と森成氏の手許とを見詰めている。金盥にはまた新たに多量の塊血が出た。新しい雛の肝臓のようである。見ると血は夫人の肩を越して三、四尺も飛んでいる。最初、我慢に我慢されたのが迸ったのであろう。汚れたる座蒲団を椽に捨て先生の口辺を拭い夫人に着換えを勧めて立たせる。シッカリなさいと励ます。夫人は森成さん、杉本さんと切なそうな声を絞っておられる。大丈夫ですから更えていらっしゃいと予はその紅に染んだ夫人の浴衣を見るに忍びず立たしめる。注射は猶予なく初まった。この時既に先生は虚脱に陥りかけて人事不省だったのである。カンフルを、ボルベルンを盛に注し駆付けた野田医師に食塩水を依頼する。杉本氏は右手を、予は左手を堅く握って殆んど死体と同じき冷たさの内に幽かに消え行く脈搏を深している。数筒の注射で少しく脈搏出た。それでも杉本氏は絶望の色を示している。「キンドは……レッツテーゼーヘン……」と予が顔を見詰めて小声にいう。情なさに込上げて予は身体が震え出した。傍に蹟ける夫人を顧みて「シッカリナサイヨ」を繰返したのは自ら鞭撻した声である。脈がまた幽かになった。予は詰と杉本氏の顔を見戍る。氏は予が視線の集まる処に灼熱を感ずるかの如く眼を外して「カンフルカンフル」という。森成氏は更に注射した。食塩水も出

来た。それは右の腕に注射された。やや有望の徴が表れた。杉本氏は夫人の詰るが如き問に答えて「モ一度来ては駄目ですね」と悲観している。

しかし当座を逃れた気がちょっとした。先生は再び覚醒して「妻は」といわれる。予はギョッとした。』

C、安倍能成の手記から（門弟の安倍能成は直接、この場に立ち合ったわけではないが、二十四日夜の危篤電報を受けとるや翌日一番で修善寺へかけつけたのであった。安倍能成をアンバイョクナルと読んで一同、縁起をかついだ話も紹介されている。漱石の机わきの手文庫の中に、この安倍能成の書いた手記が保存されていて、鏡子は、これを「漱石の思い出」の中で引用紹介している。二十五日、二十六日の漱石の様子、言葉などがわかる）

『先生の御顔には大分やつれて見えて、顎髭が一ぱいにはえて、時々あらぬほうを凄い目付をして眺められる。顔色が赤味がなくて土色に青味を帯びている。開かれた胸の上にはガーゼがかぶせてある。胃部に氷嚢をのせてあるのが、大いに自分を驚かした。それでも首のあたりから胸へかけての日頃から頑丈なからだつきが何となく心丈夫に思われた、足の上には浴衣がかけてあった。昨夜の電報で先生の兄上、姉上御夫婦、上三人の御嬢さん、中根の弟君、それから大塚先生、高濱氏、森田、野上の諸君が午後二時頃に来られたけれども、病人の神経を刺激する恐があるから皆あわず、野村傳四君だけがあって、自分と交代に病床に侍することとなった。夜朝日の池邊氏が来られて病床に通られた。先生は、

「いろいろとお世話をかけました」

と礼をいっておられた。今朝以来一つも食を取られず、時々氷で口を嗽がれるばかりである上に、眼を閉じられてもただ暫らくの間に直ぐさめてしまわれる。医者に、

「身体も動かされず物も食えないから、少しく眠りたいんですがね」

といわれた、出血を止めるために注射をする。先生はそれが痛いのでずいぶんいやがられたけども、医者が徐々にその必要を説いたので漸くうなずかれた。夜は八九時頃であったが、牛乳の滋養浣腸をやった。医者は変があれば十二時後だといったので、十二時過から起す。それで野村君と医者と自分と三人で夜交代に起きていたが、幸に事もなく、時々眼をさまされたけれども比較的よく安眠せられた。』

『夕方のことであった。

「此間は死にかかったよ」などと言われた。それから

「気分のぼーっとしている時など子供なんかにあいたくない。ただここで死ぬるのはいやだ」と話された。その後やっぱり話が一昨晩のことになって、医者が、

「あの時はしくぢりましたよ、普通の患者なら分るものじゃないんですけれども、精神力がお強いものですから」といったら、

「別に精神力が強いというわけでもないでしょう、やっぱりそれだけの体力があるのでしょう」といわれた。自分は

「獨逸語が分った相ですね」といったら、

「ウントートが何とかがシュワッハだとかいっていた」

といわれた口調に先生の平日があった。昨日より気分がよさそうだとはいうものの、何だか鬼気人に迫るような凄味は一向失せない。このようなふうでだんだんと弱って行かれるのではあるまいかなどと思うと、今こうしていられる先生と已に息絶えた先生とが思いくらべられて、どうしても解けない謎を眼の前につきつけられたような気がした。それでも先生はなかなかやかましい。医者のいろいろやる処置について、一々説明を求められる。

こんなふうではまた少しよくなっても自分勝手の考に任すようなことをせられはすまいか。こんな大病人でありながら、「俺のからだは俺が知っている」というような顔をしているのが気になった。今日はたしか葛湯を少し飲まれたはずである。

「氷を飲んではいけませんか」と医者にきかれる。

「口をお啜ぎになる時に多少ははいるでしょう」と答えると、

「それは止むを得ずはいるのです。もし直らないときまっておれば、ドシドシ飲むんだけれども。死ぬるのはよいけれども、またこの間のように苦しいと困るから、それでなければあなたが何といってもどしどしたべるのですけれども」

といわれた。今日午後二時頃に東京から看護婦が二人来て、午後六時から看護に従事するようになった。それで野村君と自分とは時々顔を出すばかりにした。夜分に異状なく、十一時頃に床についた。時々起きる積であったのに、朝までグッスリとねむりこんでしまった。

今日正午頃であったか鈴木三重吉君がやって来た。大塚さんや門下生諸君の間に、中村満鐵総裁から医者をよこしてくれるということだから、入澤達吉博士を願おうという議が成立した。』

三日記

明治四十三年八月六日から明治四十四年一月二十一日まで

第三者からみた修善寺大患をこれ迄みてきたのであるが、次に漱石自身がこの時の体験をどのように表現し、内面化しているかをみてみよう。表現するということは、即ち内面化することに他ならない。表現を抜きにした直接体験の世界は、その人だけのものであり社会性をもたない。のみならず、文学の世界にあっては、表現することが同時に物を見る目を深めていくことでもあるはずである。それは必ずしも社会的な伝達を第一義とするのでなく、むしろ表現することを通して、おぼろげな実相を次第次第に明らかにし浮かびあがらせていくということでもある。言語は、そこでは伝達のためにあるのでなく実相をつかむために存在する。表現するとは、暗いトンネルを光で照らし出していく行為のようなものかもしれない。そして、そのトンネルの全貌をついに私達は見ることができない。文字という光は、この巨大な暗闇を照らし出すには、あまりに小さく頼りにならない。しかし「以心伝心」ということが信じられないとするならば、この細い明かり——文字以外に何をもって私達は実相に迫ることができようか。「書く」ことの意味は大きい。

漱石は、修善寺大患を二段階に分け二つの方法によって書いている。即ち一つは明治四十三年八月六日から同四十四年一月二十一日にわたって書かれた日記であり、一つは明治四十三年十月二十九日から同二月二十日にわたる計三十二回、及び四月十三日に朝日新聞に連載された随筆「思い出す事など」である。前者は私的なものであり、後者は新聞に連載されたものである。

初めに日記についてみてみよう。この日記を四期に分かって紹介してみる。

第一期　八月六日から八月二十三日まで。修善寺へ来たものの、胃痙攣、吐血などに非常に苦しめられている。その苦痛の記述を中心とする。例えば「上厠便通なし。入浴。浴後胃痙攣を起こす。不快堪えがたし。十二時頃また入浴。またケイレン。漸く一杯の飯を食う」（八月八日）「夢の如く生死の中ほどに日を送る。胆汁と酸液を一升ほど吐いてから漸く人心地なり。氷と牛乳のみにて命を養う。（中略）半夜一息ずつ胃の苦痛区切ってせいせいと生きている心地は苦しい。誰もそれを知るものはない。あってもどうしてくれる事もできない膏汗が顔から脊中（せなか）へ出る」（八月十二日）「苦痛一字を書く能わず」（八月十六日）「十七日吐血。熊の肝の如きもの。医者見て苦い顔す。（中略）十九日また吐血。それから氷で冷やす。安静療法。硝酸銀。」（八月二十日）などという記述がみられる。

第二期　八月二十四日から九月七日まで。漱石の日記に妻鏡子が記す。例えば、八月二十四日の記述は次のようになっている。「朝より顔色悪し。杉本副院長午後四時大仁着にて来る。診察の夜、夜八時急に吐血五百グラムという。のうひんけつをおこし一時、人事不省。カンフル注射十五、食えん注射にてやや生気つく。皆朝までもたぬ者と思う。社に電報をかける。夜中ねむらず」以下に「朝容態聞けば、きけんなれどごく安静にしていればもちなおすかも知れぬという。杉本氏帰る」（八月二十五日）「容態だんだんよろし。阿部さんと小宮さんがさん歩に行き、帰りに草花を取てくる。花いけにさす」（九月五日）などという具合に、漱石の容態と、出入りする様々な人の動きを記している。

第三期　九月八日から十月十一日まで、即ち容態も幾分回復した漱石が再び自らペンをもって日記を記し始めてから再び、東京へ帰る日までである。大吐血から二週間経て、再び記されたその日記は全く別人の趣きがある

その最初、九月八日の日記の全文を紹介しておこう。

「別るゝや夢一筋の天の川

秋の江に打ち込む杭の響かな

秋風や唐紅の喉喉仏

赤蜻蛉、燕。

languid stillness. Weak state. Painles. Passivity.

庇護、被庇護。

氷。

intellectuality に indifference。Self-assertion に indifference。人事の葛藤に indifference。goodness, Peace, calmness. Out of struggle for existence. material prosperity. nature.

Essen、住宅。西洋と日本の懸隔。

自然淘汰に逆う療治。小児の撫育より手がかかる。半白の人果してこの看護をうくる価値ありや。

われよりいえば死にたくなし。ただ勿体なし。」

心の中の静かな平和、看護してくれる人々に対する謙虚にして素直な感謝、目に入ってくる、耳に聞こえてくる秋の風物に対するみずみずしい感受性……一言で言って漱石はここで生きていること、命あることの幸福をしみじみと感じとっているのである。漱石の日記、もしくは人生の中で、これほど長い期間にわたって虚心な、明るい心が続いたことはなかった。心の弾み、高揚はしばらく持続し、日記は明るい調子で覆われているが、全体としてその流れを見るなら、詩的とも言える強い喜び、感動から、しだいに周囲、特にそ

の自然に目がいくようになり、俳句と共に九月二十日からは漢詩も自ずと作られるようになっていく。秋の修善寺は桔梗、菊、紫苑、コスモスなど様々な草花が咲き乱れ、修善寺を発つ日には「竹、松山、岩、木槿、蕎麦、柿、薄、曼珠沙華、射干悉く愉快なり。山々僅かに紅葉す。秋になってまた来たしと願う」と名残りを惜しんで去るのである。身体のことに関して言えば健康が日々回復し、食べ物が旨いと感じられ体力の次第についていく様子がいかにも喜ばしげに書かれている。手術でもして完全に病が直ったというわけでもなく、依然として胃潰瘍の身であり、ただ一時的に、危機を乗り越えたというにすぎない。にもかかわらず、漱石は、この大患によって完全に病から開放された人の如く、うれしく感じているのである。大吐血はその点から言えば、精神的には、これ迄の膿(うみ)を一挙に絞り出す、手術にも似た役目を果たしていたようだ。

第四期　十月十二日から明治四十四年一月二十一日まで。東京に戻って長与病院に入院している時の日記である。第三期に見られたような心の弾みはもはやここでは見られない。草花に触れる喜びも東京の入院生活には乏しく、代って味けない人事についての叙述がほとんど無味乾燥のように綴られている。十一日以降はその記述もめっきり減り、自然に消えるようにして日記は終る。その最後の日記は「五十四キロ八百」と体重が記されているばかりである。なおこの体重については十月三十日に初めて見える。即ち「昨日体重をはかる。フラネルに簿い毛織のシャツを着て四十四キロ五百ありたり。もと病院を出た時は四十九キロなにがしなりき」とあるのがその最初で以後数回にわたって記されている。「五十四キロ八百」をもってこの日記の終わりとした漱石には、病から立ちあがり、再びこの現世で生きねばならぬという実感がこめられていると思う。十月三十一日の日記に「今の余は人の声よりもの声を好む。女の顔よりも空の色を好む。客よりも花を好む。談笑よりも黙想を好む。遊戯よりも読書を好む。願ふ所は閑適にあり。願ふものは塵事なり」と書いた漱石

に、現世に戻りたいという憧れはなく、できるなら病気のままでいたかったに違いない。九月二十六日の日記にも「病正に軽快に移らんと欲して今更病を慕うの情に堪えず。本復の後はかかる寛容ある、stress なき生涯、自己の好むままの心の働きを尽して朝より夕に至る時間、朝夕余の周囲に奉侍して凡て世話と親切を尽す社会の人、知人朋友もしくは余を雇う人のインダルジュース。――これらは悉く一朝の夢と消え去りて、残るものは鉄の如き堅き世界と、磨き澄まさねばならぬ意志と、戦わねばならぬ社会だけならん。余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず、切に考うれば希望三分二は物質的状況にあり。金を欲するや切也。」と記しているのはその証明にもなる。健康が戻ればいやがおうでも働かねばならない。何のためにか。「金」のためである。そのためには朝日新聞社員として、再び小説の筆を執るしかないのである。

以上、四期に分けてその日記を紹介してみた。漱石は平生、あまり日記をつけなかった人である。「漱石は、自分が何所かに旅行をするか、それでなければ、もうそろそろ小説を書く準備をしなければならないというような場合かでないと日記をつけていない」とは小宮豊隆の記すところであるが明治四十三年八月六日に始まるこの日記は、誰であろうと未来のことはわからぬのであるにせよ、全く本人の予想もしないような方向に進んでいった。恐らく漱石とすれば伊豆の自然をたっぷり味いつつ、かつ又俳人であった松根東洋城と句会でもやって、それを記して置こう、というのんびりした気持ちから書き始めたものであろう。そして確かに伊豆の自然を満喫し、句や漢詩が生まれた。しかし、それが病を契機として感じとったものであること、そしてその核として瀕死体験をもつ、などということは全く思いもかけぬことであったに違いない。日記には、その日その日の感想が時として単語だけを並べるようにして記されている。この日記の中心は第三期にあるが、それは素朴で正直な実感に支えられた粗削りといってよい感想の叙述である。勿論、これを作品として発表しようなどという意図はなく、日常の生活を離れた

体験のメモにすぎなかった。

「思い出す事など」は、この私的な日記、メモに、公的な形を与え、素朴な感想にすぎなかったものに論理の筋道を与え、俳句、漢詩と散文が一体になった特異な作品として完成させたものである。逆に言えば、日記や俳句、漢詩が先にあって、これを材料として思索を深めたところに生まれたのが「思い出す事など」である。「思い出す事など」は、前述したように十月二十九日から、つまり日記の第四期と重複する形で連載され始めた。それは東京に――現世に帰ってきた漱石が、ごくごく近い過去、思い出すには早過ぎるような過去、しかも心理的にはるかに遠ざかってゆく過去であるがゆえに「思い出す事など」と題して定着させねばやまなかったものであろう。その意味で、この題は暗示的で、きわめて含蓄に富むものと言わなくてはなるまい。「思い出す事など」で漱石が何を語っているか、その考察は次項に譲るとして俳句や漢詩つまり韻文と散文の融合したスタイルについて考えてみると、これは何も漱石の独創ではなかった。古典文学の世界をみると「伊勢物語」や「奥の細道」などの有名な作品がすでにそのようなスタイルで書かれているし、この他、幾つもの作品をあげることができよう。そしてこれらの作品の多くは初めに韻文があった。「伊勢物語」は和歌が最初にあって、時にはその詞書が一つの物語になって展開しているし、「奥の細道」の場合、当時すでに有名であり全国に門人のいた芭蕉があちらこちらの門人の歓迎を受け、しばしば句会などを行いながらの旅であった、といわれる。即ち旅の記録としての句は芭蕉の頭陀袋の中に入っており、それを契機としてふくらませながら時として虚構すら編み出しつつ「奥の細道」が書かれたと言われる。漱石の場合、漢詩や俳句がその役目を果たした。和歌から恋物語が生まれ、俳句から紀行文が生まれたひそみに倣って言えば、漢詩や俳句を契機として思索が練られ「思い出す事など」が誕生したのである。ここで特にその漢詩が重要なのは、それが思索的・人生論的な色彩を色濃くもっているからである。

四　大患直後の漢詩

大患時代の漱石の漢詩を吟味して、漱石がこの大患をどう受けとめ、どう表現していったのかをみてみよう。漱石の日記はそのままでは「作品」とはならないが、漢詩は完成された「作品」であり、これだけで充分に鑑賞に耐えるものである。「思い出す事など」との関連を考えるなら、前述したように、漢詩的世界を散文化し、思索として深めていったのが「思い出す事など」である。散文とは言え、そこにはなおも漢詩的思考法も見られるのであって「思い出す事など」に記された漢詩を抜きにして、これを読んだとは言えないだろう。現代の私達にとって漢詩は古典にすぎず、これに自らの思想や感情を盛るということはきわめて限られたことになってしまったが、漱石にあっては、これが最も自然な思想と感情の表出手段だったのである。しかし、それがどれほど伝達性をもっているのか、「思い出す事など」を書いた漱石には、それを補う意識も働いていたかもしれない。現代とは違って漢詩教育が相当高いレベルにあった当時においてさえ、「朝日新聞」に発表された漢詩を、書き下ろし文もなしの白文のまま理解しえた人は必ずしも多くないだろう。

A　淋漓絳血

淋漓絳血腹中文　嘔照黄昏漾綺紋　入夜空疑身是骨　臥牀如石夢寒雲

淋漓たる絳血　腹中の文　嘔いて黄昏を照らして綺紋を漾わす　夜に入って空しく疑う身は是れ骨なるかと　臥牀　石の如く寒雲を夢む

（口語訳）ほとばしり出る赤い血潮。腹中から吐き出された血はたそがれ時の部屋を照らして美しい模様を描いた。夜になってうつろに思われたのはわが身が骨だけになってしまったのではないかということだ。病の床にじっ

と臥し、石のようになって、寒々とした雲を夢みたことである。（拙訳、以下同じ）

（解説）八月二十四日の大吐血を詠んだもの。吐血というは漢詩の素材としては全く異色のものであり例がないだろう。前に紹介した妻鏡子や、雪鳥の記録と照らしあわせて読んでみると興味深い。看護する者からすれば、劇的な事態の進行に気も動転しているが、当人は、血を吐いて後は意識不明。後になって、妻から、その時の状況を聞き、自分の体験を思いあわせて詩としたわけである。前半では赤い血潮の妖しいばかりの美しさ、後半では死に接近している寒々とした心境が巧みに形象化されている。

B　仰臥

仰臥人如啞　黙然見大空　大空雲不動　終日杳相同

仰臥（ぎょうが）　人　啞（おし）の如く　黙然（もくねん）として大空を見る　大空　雲動かず　終日　杳（はる）かに相同じ

（口語訳）私は、仰向けになって啞のように黙って大空を見ている。大空には雲一つ動かない。一日中（見ているうち）雲も自分もじっとしたままで一つに溶けあってしまうような感じを覚える。

（解説）一日中床に臥して、口をきくこともなく、雲を眺めている、その心境を詠んだものである。一見すると、病床の単調な、無為倦怠の詩と思うかもしれない。しかし、漱石がこの詩で言いたかったのはそうではない。即ち「思い出す事など」二十で、この時の体験をドフトエフスキーのてんかんの発作がくる前に襲われる歓喜と比べている。この体験については後述することとしたいが、ここで重要なのは雲と自分が一体になる――自然と同化するという感覚であろう。漱石は病を通して、己れを無とする、謙虚な、素直な感覚をもつが、それは自然と対する時、自分と自然が一体のものだと見る思いへとつながっていく。そしてこれこそ、思想として後々まで深められていくものであり、その意味でこの詩は重要な意味をもっている。自己を無にして自然に同化する、そこに深い安らぎと

幸福があるという考えは後の「死への憧れ」につながっていくと思われるからである。

C　風流

風流人未死　病裡領清閑　日日山中事　朝朝見碧山

風流　人未だ死せず　病裡　清閑を領す　日々　山中の事　朝々　碧山を見る

（口語訳）自分は奇跡的にも永らえ、風流に心魅かれている。病のうちにあって、心は清らかさ、閑かさに占められている。日々俗界を離れた山中で過ごす思いであり朝な朝なに碧い山を仰いで暮らしていることだ。

（解説）俗世間からの逃避、そして風流の世界への憧れはすでに「草枕」にも伺われるところである。その憧れが今適って悠々たる自足のうちに生きて何一つ不足はない。「風流」という伝統的な観念が、病の体験を通して歌われているのである。しかも、その病が逆に近代の病を批判する鍵となっている点に漱石が過去の作家ではなく、近代の作家と言われるゆえんもある。漱石は「風流」に新しい意味を与えたとも言えよう。

D　天下

天下自多事　被吹天下風　高秋悲鬢白　衰病夢顔紅　送鳥天無尽　看雲道不窮　残存吾骨貴　慎勿妄磨礲

天下　自（おのず）から多事　天下の風に吹かる　高秋　鬢白（びんはく）を悲しみ　衰病（すいへい）　顔紅を夢む　鳥を送って天尽くる無く　雲を看て道窮（きわま）らず　残存吾が骨貴し　慎んで妄（みだ）りに磨礲（まろう）する勿（なか）れ

（口語訳）世の中には、いろいろと煩わしい事が多い。自分もこれ迄、そのような世の中の風に吹かれて生きてきた。しかし今、空高く澄みわたった秋空の下、髪の毛も白くなり、年老いて病んでいる。そして紅顔の青年時代を夢のように遠く思い出すばかりだ。空飛ぶ鳥を見るや、その空のつきることない無窮が思われ、雲を見て道の限りないことが思われる。幸いにも生き延びたわが身が尊く感ぜられる。この尊い命をむやみにすり減らすようなこと

はすまい。

（解説）大患は漱石に肉体の衰えと老いの自覚をもたらした。奇跡的にも助かった命――それを尊いものと感じ、残された人生を大切に過ごしていきたいと思う。素直な感慨であり、助かったことの喜びもにじんでいる。残された生の課題は何か――それはやはり無窮の「道」の探求であった。

以上四つの漢詩を紹介してみた。この四篇で大患時代の漢詩すべてを代表させるわけにはいかないが、おおよその傾向、特色は具体的に感じとることができよう。「思い出す事など」には、全部で二十一篇の漢詩が収められその大半は日記に記されているそのままであるが一部推敲したものもある。全体として、この時代の漢詩の特色をまとめてみると、次のようなことになろう。

①瀕死という特異な体験を詠んでいる。先程紹介した漢詩Aの他に、「万事休時」「傷心」「縹緲」「円覚参禅」（漱石自身は漢詩に題をつけていないので、その詩の最初の語句を仮に題として示した。A～Dの漢詩も同じである）なども同様である。

②自然に憧れる、もしくは自然と同化している「風流」の観念が伺われる。これもAやBの漢詩の他に「遺却新詩」「秋露」「日似」などの詩には、このような心情が伺われ、漱石はそこに深い安らぎ、平和を感じ、心から満ち足りている。

③老いの意識の深まりがある。漢詩Dに伺われるように、これは一つには肉体の衰えの自覚であり、一つには自分の青春をはるかかなたに過ぎ去ったものとして愛惜する念につながる。又季節としての秋が、人生の「秋」と深い孤独や寂しさにつながっていく。「桃花馬上」「馬上」などにも同様の心境が伺われる。

④奇跡的に生き永らえた命の尊さを自覚し、残された人生を大切にしたいと願う。漢詩Dに、このような思いが伺

われる。「万事休する時一息回る　余生豈に忍びんや残灰に比するを」（万事休すと思われたその時、奇跡的にも息を吹き返した。残された生をどうして燃え残りの灰などに喩えることなどできよう）と詠んでいる漱石は、心に深く期するところ、新しくこの人生に旅立つような決意もあったに違いない。そして事後、これ以後の創作活動は決して、単なる「残灰」などでなかったことを証明している。

⑤絶対的なもの、永遠のものにつながる求道の念がある。漢詩Dの「雲を看て道窮まらず」であり、はかない人生にあって容易には至り難い道を求める念は「帰来命根を求むれば杳（よう）として竟に知り難し」（再び生き帰って命の根底を求めてみるが、それははるか深くついに知ることはできない）とも詠われているが、瀕死体験は漱石に人生の深い謎として刻印され、それは自ら存在の根拠を求める気持ちへと向かわしめたようである。

五　「思い出す事など」

「思い出す事など」は明治四十三年十月二十九日から明治四十四年二月二十日にかけて東京朝日新聞に連載された随筆である。一回の分量はほぼ千六百字で、この時まで計三十二回。この間、漱石は、修善寺から帰京して再び長与病院に入院中である。退院したのが二月二十六日で、修善寺に行って苦しみ、人事不省に陥り、次第に体力を増し、再び「この世」の人となるまで約七ヶ月かかったことになる。作家としての活動は六月十二日「門」の連載を終了して長与病院での診療、そして六月十八日から七月三十一日までの入院の間も評論を中心として矢つぎばやに次々と書いている。病気による休筆は、約四ヶ月に満たない。旺盛な筆力、又責任感の強さを思うべきであろう。その間も日記をつけ俳句や漢詩を次の作品の素材として書き続けていたことを考えれば、ほとんど休みなしである。書くこと、それによって身を立てることは、私小説家ならずとも、自分の生活や思考のすべてを書くことのために捧げるということでもある。「思い出す事など」の中には子供からの手紙がそのまま載せられている。作家漱石は、すでに単なる一私人ではなく、その生活や表現のすべては、新聞を媒体として、社会全体の関心の中にあった。漱石はそれを充分意識していた。病気によって休筆を余儀なくされた時、漱石は社会に追いたてられるようにして書いていく自分の姿を初めて相対化してみる目を幾分か持ちえたのかもしれない。「切に考うれば希望三分の二は物質的状況にあり、金を欲するや切也」（九月二十六日の日記）と記された言葉は、自分と社会をつなぐものが「金」であること、そして自分は「金」のために働かなくてはならないという思いがよぎったのではなかろうか。しかし漱石にとって「書くこと」以外に、自己を生かしきる道があったわけでもない。「思い出す事など」は先程の三十二回に加え、退院して四月十三日「この世」の人となった漱石が「病院の春」と題して書いたものを加

え、全三十三回をもって完結する。

その執筆の動機が、「四」に書かれている。それによると大患という貴重な体験でありながら、日を経るに従ってその記憶は薄れてしまう。今のうちに「病気の経過と、病気の経過に伴れて起こる内面の生活」を記録しておきたいということである。それは同時に「病によってわずかに受け得た長閑な心持」をなつかしみたい、と言うことでもあった。奇妙なことと思われるかもしれないが、実際、漱石にとって修善寺体験は、恐らく生涯でも最も幸福な時期であった。日記の、やや上ずった高揚したような調子は、他のいずれの時期にもないものであり「思い出す事など」を書くのは、これを記録にすると同時に、幸福の記念としたいという意味もあった。私達が幸福な時期の古いアルバムを懐かしく手にとってみるように日記や漢詩をひもときながら新たに筆を起こしていく漱石の胸中には、懐旧の情にあふれている。しかし、そればかりではなかった。「思い出す事など」という題は、その点で暗示的である。これ単に「思い出す事」を書いたと考えるのは間違いである。ここには単なる思い出ではなく、生と死という解き得ぬ難問に直面して思索している漱石の今の思いがある。これは瀕死体験をくぐりでけた漱石の死生観、人生観を述べた貴重な本なのである。「など」にこめられた含蓄は深い。それは、この体験から「助かって良かった」風の安易な結論を出すことを許さない。教訓など探したくても見当たらない。漱石は、自分の奇跡にも近い生死の体験を得意気にふり回し、人に教えてやろうなどと考えていない。ただ〳〵自分の正直な感想、腹の底からの実感を書き綴っているばかりである。江藤淳は、この「思い出す事など」について次のように述べている。

「この概ね通俗的な人生観乃至生死観をのべた随筆ほど多くの意味ありげな註釈で汚されてきたものはない。生死の境にある人間から高邁な教訓を期待したがるのは意地汚い教師根性である。（中略）必要なのは修善寺の漱石がどのような教訓の材料になりうるかではない。ぼくらは単にこの幸福な体験を彼と共に生きようとするのである」

「いたって平凡常識的であると言わざるをえない生死観を説く、生活に疲れた初老の男がぼくらを快い耽溺に誘う。」

なるほどここで言うように「思い出す事など」に「高邁な教訓を期待」するのは間違いであろう。しかし、私は以下の点でこの批評に疑いを持つ。

第一に、ここに述べられていることは「通俗的」「平凡常識的」な人生観、死生観であろうか。「三十分の死」これはきわめてまれな特殊な体験である。特殊な体験は必ずしも、特異な観念を持つことに結びつくものではないだろう。が、それにしても、どこまでも自己を追求し、自己に忠実であることをぎりぎりまでつきつめた漱石である。「通俗」の目に曇らされるような妥協をするとは思われないし、事実「思い出す事など」に伺われる思索は「通俗的」「平凡常識的」どころか、余人の至りえぬ深みに達していると私には思われる。これを「平凡」とするなら、あらゆる死生観、人生観が「平凡」だということになってしまうのではなかろうか。

第二に、「生活に疲れた初老の男がぼくらを快い耽溺に誘う」というが、不幸にして文学的センスに恵まれない私は、この「ぼくら」の仲間入りができないのである。これは、おそらく後で述べるように、病が平安、至福をもたらす、と「思い出す事など」の中で書かれていることに関連して述べたものであろうが、読者はこれを読んで本当に共感でき、「耽溺」できるのだろうか。少くとも私は、共感、「耽溺」するどころか、このように書く漱石を痛々しいと感じたし、恐らくあらゆる読者の共感をはばむような孤独な漱石の姿がそこにあるのではないかとも感じた。しかし、感想はひとまず置く。私はこう感じました、などということを並べても仕方あるまい。大切なことは、事実として何を言っているかである。それをしっかり捉えないことには真相は見えて来ないだろう。「思い出す事など」について書かれた幾つかの文章を読んで私が不満に思ったのは、皆、それぞれが勝手に、この随筆の気

に入ったところをとりあげて、それぐもっともらしいことを言っている、ということである。その限りでは、それぞれ鋭く正しいのであろう。しかし、私はそこに文芸研究の頼りなさをも感じたのである。文芸研究とは、作品の全体を見ることなしに、好き勝手に琴線に触れたところに即して勝手なこと言うことなのだろうか。「思い出す事など」は、全部で三十三回にわたって、その期間も半年にまたがって断続的に連載されており、思い出ばかりではなく現在の感慨も含めて言わば過去と現在が交錯するような形で、多くの話題が取り上げられているのである。場合によっては、前後矛盾するようなことも書かれている。それは次第に思い出の世界から、現実の世界に戻っていく漱石の心とも対応している。小説の場合は、筋の一貫性があり、一つの主題としてまとめられるのだろうが、このように多岐にわれるテーマを扱った随筆の場合、主題をめぐって、解釈が揺れ易いのである。

「思い出す事など」をまとまった一つの作品として、全体としてみていく場合、大切なのは各回ごとに何が書かれているか一つ一つまとめることと、もう一つはそれが時間的契機とどうかかわっているかを確かめてみるという地道な作業である。そこで、このような視点から作品全体を展望する表を作成してみると次のようになる。

回	内容	構成	時間的契機
一	再び長与病院へ。修善寺に行く前に入院していた時の思い出。	プロローグ（序）	再入院
二	長与院長の死を知り―生き残った自分との対比。ありがたさ、幸福。	①二人の死と助かった自分	←
三	ジェームズ教授の死を知る―ジェームズへの共感。（修善寺滞在中）		前の入院、修善寺を発った日
四	「思い出す事など」執筆の動機―記録、懐かしみ。	②執筆の動機	新しい情報（二人の死）

五	俳句と漢詩―自由で幸福な時期。			
六	「列仙伝」を読んだ感想―心の余裕。			
七	「社会学」を読んだ感想―宇宙の歴史に比べ自分独りの一喜一憂は無意味。	展開一 八月二十四日以後の心境―病の至福。	再入院 ← 二十四日以降の病床	
八	八月二十四日を迎えるまでの病状。			
九	東京を発ち修善寺へ。			
十	大雨と洪水のこと。			
十一	妻からの手紙―列車の不通、妻の妹のこと、草平のこと。	展開二 八月二十四日を迎えるまでの病状、身辺のこと。	再入院 ← 八月二十四日を迎えるまで	
十二	同宿の泊まり客のこと。			
十三	八月二十四日のこと―三十分の死。			
十四	意識の回復から二度目の失神、カンフル、再びの意識回復まで。			
十五	三十分の死の感想―生と死が没交渉。	展開三 瀕死体験の記録とその考察。	再入院 ← 八月二四日。	
十六	危機の夜を脱する。			
十七	スピリチズムへの関心↔自分は意識を失っただけ。			
十八	身体の変化―骨の硬さ、安らかながら痛み多い世界			
十九	人生＝互殺の和。住みにくい。→病気をして人々の親切を感じた。			
二十	ドストエフスキーの癇癪発作前の快感―大空との融合した自分の喜び。	展開四 八月二十四日以降の心境―生き返った喜び	再入院 ← 八月二十四日以降	
二十一	ドストエフスキーの奇跡的な生還の喜び―自分の生き返った喜び。			
二十二	真白な着物を着た女（看護婦）の看護。			
二十三	好意のひからびた社会→病気をして初めて人の好意を感じた。			
二十四	南画に似た心持ち―美しい雲と空。	展開五 身辺雑事の記録 （修善寺の自然・	再入院 ← 八月二十四日以降	
二十五	病や死を理解しない子供との面会。			
二十六	飲み物や食べ物のうまさ。			

二十七	自由なる精神生活。		家族のことなど）
二十八	和尚の身の上判断―髭を剃る。		
二十九	修善寺の大鼓の音。		
三十	草花のこと―薄　女郎花　コスモス　あけび。		
三十一	亡くなった兄のこと―墓か浮世か。		
三十二	修善寺を発つ―第二の葬式。	エピローグ（結び）	再入院→修善寺を発った日（十月十日）
三十三	長与病院での再入院の回顧―アイロニー。	第二の葬式・アイロニー	自宅→再入院（正月）

（注）①「時間的契機」というのはいつの時点に立って、いつの時点を回想しているのか、ということでそれを矢印で示した。

②展開四と展開五は一つにまとめることもできるが、精神の高揚の伺われる「四」と、それが覚めていって周囲に目が向くようになった「五」で分けてみた。

江藤淳の「快い耽溺に誘う」というのは、展開「四」あるいは展開「一」の部分を針小棒大風の感想として述べたものだろうが（その感想としても私は従えないということは前述した）それは「思い出す事など」のすべてではない。「思い出す事など」は、漱石にとって最も幸福と感じられた一時の思い出を大切にし、それに耽りたい漱石と、その幸福感が次第に遠ざかり「不愉快」な現実に戻りつつある漱石の姿が錯綜している。幸福について書く人が幸福であるとは限らないし、まして幸福であった、と語る人は、むしろ幸福でない人なのである。

以下「思い出す事など」の中から幾つかの問題を取りあげて考察してみたい。

A・逝く人と留まる人

再び長与病院の人となった漱石はそこで初めて院長長与称吉の死を知る。最初の入院の時、世話になったのは勿論のこと、日頃慢性的な胃病で苦しんでいた漱石にとって、胃腸病院、特にこの長与病院とのつながりは深かっ

た。修善寺で倒れた時、山中に二人の医師を派遣してくれたのも院長の特別のはからいによるし、漱石の病状を最も案じてくれた主侍医である。院長は東京帝国大学を出てドイツに留学後、明治二十九年に胃腸病院を設立した人であり、漱石よりわずか一年年長、亡くなった時、四十四才であった。（後年漱石の遺体を解剖したのは、この院長の弟にあたる長与又郎であったし、作家の長与善郎も同じく弟である。）実は、修善寺で漱石が生死の間をさまよっていた頃、突然倒れたのであるが、妻は漱石の病状を気遣ってそれを伏せていたのである。同年輩と言ってもよい、この院長の死は、漱石にとって大きな驚きであった。それは自分が生きていることのありがたさを一層強く感じさせるものとなった。「考えると余が無事に東京まで帰れたのは天幸である。こうなるが当たり前のように思うのは、未だ生きているから悪度胸に過ぎない。生き延びた自分だけを頭に置かずに命の網を踏み外した人の有様も思い浮かべて、幸福な自分と照らし合せて見ないと、わがありがたさも分からない。人の気の毒さも分からない」と書いているように、命あることの「ありがたさ」（感謝であると同時に、それは文字通り、有り難さ、めったにないこと、奇跡的に助かったという思いも含んでいる）を深く感ずる。

長与院長の死を知って「茫然」たる感慨におそわれたその翌日、こんどはウィリアム・ジェームズの死を新着の外国雑誌によって知る。ジェームズの「多元的宇宙」は、修善寺にいた時読んで、その思想に共感を抱いていたものである。日記によれば八月七日「独りでジェームズの『多元的宇宙』を読む。何だか意味がわからず」とあったものが九月二十三日の記述では「午前にジェームズの講義を読む。面白い」「午前ジェームズを読みおわる。好きな本を読んだ心地す」（「ジェームズの講義」とは「多元的宇宙論」で、この本はもともと大学生相手の講義をまとめたものである）と感想が変ってくる。一冊の本に対するこの感想の変化の背景に、「三十分の死」の経験がある、と私は思う。「三十分の死」によって漱石は、生とは何か、死とは何かを考えた。そのさい一番大きな影響を

受けたのは、ジェームズの、この本であった。このことについては後で述べたい。ともあれジェームズの思想は、漱石の死生観に一つの光を与えるものであった。その意味で、ジェームズは、精神的な恩人であると言って良い。そのジェームズの死である。

この二人の死について漱石は次のように言う。「余の病気について治療上色々好意を表してくれた長与病院長は、余の知らない間にいつか死んでいた。余の病中に、空漠なる余の頭に陸離の光彩を抛げ込んでくれたジェームズ教授も余の知らない間にいつか死んでいた。二人に謝すべき余はただ一人生き残っている。」さらに、ここではとりあげていないが、「七」には漱石が長与病院に再入院中の大塚夫人が亡くなったことが書かれている。大塚夫人とは漱石の友人で美学者の大塚保治夫人楠緒子（くすおこ）のことで歌人、小説家でもあった。明治四十三年十一月十五日三十五才の若さで亡くなった夫人のため「ある程の菊抛げ入れよ、棺の中」という手向けの句を作っている。近年の漱石研究では、この夫人に対する漱石の恋愛感情を指摘する声もある、だとするとその死の持つ意味はもっと大きな意味をもつことになろう。

人は多くの場合、「生きている」ということについて、さほど自覚しないものである。生きるのに忙しい時、生と死という根本的な問題に思いを潜めるゆとりはない。意識して、それを考えてみても、単なる観念上の問題にとどまってしまうだろう。それはやむをえないことである。しかし、瀕死体験は自づと死を身近に意識させることになった。その上に又、長与院長の死、ジェームズの死、大塚夫人の死――明治四十三年は、漱石にとって、死に深く彩られた年であった。

B・病の至福

「思い出す事など」の「五」で、漱石は、健康な時と病気の時を比較する二元論的な思索を展開している。それ

によると、前者において人間は「生存競争裏に立つ悪戦の人」であり「火宅の苦しみ」を受け「夢の中でさえ焦々(いらいら)」しているという。これに対し後者は、「現実の生から離れ」「一人前に働かなくてすむ」ことから「長閑かな春」を味わい「安らかな心」で過ごせる。そこに「本来の自由」がある、というのである。常識的な見地に立つなら、病は不自由な、苦しい、いやなものであろう。誰が好んで病にかかろう。しかし、病には、長い人生における休息の意味もあり、漱石も言うごとく「一人前に働かなくてすむ」ことからくる「余裕」もないわけではない。だが、ここに記されているのは、そんな消極的な意見ではない。病の積極的な礼讃であり、自らの体験を懐かしみ（遠ざかっていくがゆえに、なお一層「懐かしい」のである）その時の状態に憧れんばかりのひたむきさで、病の功徳を語っているのである。同じことは、妻鏡子あての次の手紙にもはっきりと伺われる。同じ長与病院に入院中の十月三十一日の手紙である。

「世の中は煩(わずら)わしい事ばかりである。ちょっと首を出してもすぐまた首をちぢめたくなる。おれは金がないから病気が癒(なお)りさえすれば厭でも応でも煩わしい中にこせついて神経を傷めたり胃を傷めたりしなければならない。しばらく休息できるのは病気中である。その病気中にいらいらするほど、いやな事はない。おれにとって、ありがたい大切な病気だ。どうか楽にさせてくれ。」

このように漱石が病を「ありがたい」ものとし、その至福を語れば語るほど露わに見えてくるのは、漱石の不幸である。肉体的にも、精神的にも傷だらけになった生活に疲れた漱石の姿である。「生活に疲れた初老の男」の姿を「思い出す事など」の中に見た江藤淳の指摘は、その限りでは正しい。ただ私は、そのような漱石が語る病の至福に「耽溺」できないし、それどころかその不幸に同情を抱かざるを得ないのである。一体何が漱石を不幸にしているのか。エリート中のエリートとして、世の尊敬を集め、客観的には何一つ不幸の原因の見当たりそうもない、

「成功した作家」「一流の学者」の不幸とは何か。

ありふれた人生観を述べるようで恐縮ではあるが、私は、「幸福」とは、本人が幸福だと感じ、満たされていると感じるところにしかない、と思う。地位があること、金があること、健康であること……それらは一般に「幸福」になるための条件として、しばしば挙げられるものである。だがそれら必要条件であって絶対条件ではない。それどころか時として必要条件でさえないことすらある。それでは何が「幸福」なのか。私は、それを、本人の「幸福」を感ずる、自足の思いを感ずる、その度合による、と考える。そして、漱石を不幸だと断言するのは——幸福であったのは、この大患の時期の他にいくらもないだろう——その生の意識が、暗い厭世観、人間観に彩られているからである。家族から見た漱石の姿がそうであるし、漱石の書いたものの中にも、幾らでも見つけることができる。引用しだせばきりもないが二十三才の時、友人であった正岡子規にあてた書簡に次のような一節がある。

「この頃は何となく浮世がいやになり、どう考へても考へ直してもいやでいやで断ち切れず、さりとて自殺するほどの勇気もなきは、やはり人間らしき所が幾分あるせいならんか。ファウストが自ら毒薬を調合しながら口の辺りまで持ち行きて遂に飲み得なんだというゲーテの作を思ひ出して自ら苦笑被致候。小生は今まで別に気兼苦労して生長したといふ訳でもなく、非常な災難な出会ふて南船北馬の間に日を送りしこともなく、ただ七、八年前より自炊の竈に顔を焦し寄宿舎の米に胃病を起こしあるいは下宿やの二階にて飲食の決闘を試みたり、それはそれはのん気に月日を送りこの頃はそれにも倦きておのれの家に寝て暮す果報な身分でありながら、定業五十年の旅路をまだ半分も通りこさず、既に息竭候段、貴君の手前はづかしく、われながら情なき奴と思へどこれも misantropic 病なれば是非もなし……」

青年漱石は、この手紙を書いたころ、恐らくうつ状態に陥り、自殺の観念も頭をよぎったものと推定される。そ

れから二十五年経った大患以後の、四十八才の時に書いた「硝子戸の中」には次のような一節がある。

「不愉快に充ちた人生をとぼとぼ辿りつつある私は、自分の何時か一度到着しなければならない死という境地について常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思うこともある。『死は生よりも尊い』こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往来するようになった」

大患直後の、あの幸福感、自足の境地、又、これによる人生観の確立などということがなかったことは、大正三年の半狂乱とも思われる漱石の日記にも明白であるし、今引いたこの一節によっても伺われるだろう。それどころか、「思い出す事など」自体が、過ぎ去ってゆく幸福の余韻のうちに書かれたものであるし、この作品の末尾には、もはや漱石の「苦い顔」が伺われるのである。その点では夏目伸六の言う通りに違いない。漱石の生涯には一貫して暗いものが流れている。病跡学（パトグラフィ）の教えるところでは漱石は、そううつ病ないし、分裂病で苦しみ続けた作家である。短期間におけるあれほどの作品の豊かさは時として狂気にも近い情念の生み出したものかもしれないのである。

話題を戻す。修善寺における病のもたらす至福の体験は、俳句や漢詩の創作へと自然につながっていった、と漱石は言う。健康な時に俳句や漢詩を作るのは「どこか間隙があるような心地」がし「同好の評判だけが愉快」であるものの、後に残るのは「多量の不安と苦痛」にすぎない、と漱石はいう。それに対し、病気の時は「われともなく興が起こる」のが「嬉しく」、句や詩に「仕立て上る順序過程」つまり創作過程が「嬉しく」、出来上がるのが又「嬉しい」、と三度も「嬉しい」という言葉を繰り返している。このような説明自体が、東洋流の「隠逸」の観念を背景としたものであることに私達は注意しなくてはなるまい。「廬を結びて人境に在り而かも車馬の喧しきなし。

君に問う、何ぞ能く然るやと。心遠ければ地も自ら偏なり」と歌った陶淵明の心境に託して、漱石は、「閑適」の喜びをここで語っているのである。詩人であるとは俗世間を離れ、自然を共とし風流韻事に親しむこと――漱石はここでほとんど東洋の漢詩人のように見える。しかし、自ら役人の生活を捨てて、田園の生活に帰った陶淵明と病に犯されてそれ故一時の平安を味わった漱石との距離は大きい。なるほどその漢詩を見れば漱石は「仙境」にある幸せを語ってもいるがそれは漱石の漢詩のごく一面に過ぎない。一方人事不省状態に陥って日記をつけることもままならぬ重体が続いた後、再び自ら日記を記し始めるその日から俳句は作られている。私はここに生き返った漱石の新鮮な感受性の働きがあると思う。生き返ったものの新鮮な眼差から俳句が生まれているし、病後の感懐がそこには深く託されている。大患時代の俳句の特徴はそこにある。これに対し漢詩はやや遅れて九月二十日から作られている。俳句は嘱目の景や感懐を述べるのに対し、漢詩は境涯を述べ、人生を語ろうとする。ここには単に俳句による自己表出では満たされない、内省的な思索者漱石の姿がある。修善寺に行っている間の日記を見ると七十七の俳句と十三の漢詩が記されているが「思い出す事など」には俳句十九、漢詩が二十一収められている。似通っているものも含めると両者に共通なものは俳句では五首、漢詩では十三首となっている。つまり俳句は大部分が切り捨てられたのに対して漢詩はほとんど生かされているのである。このようなことを考えてみると俳句と漢詩を漱石の言うごとく一括して単に「閑適」「隠逸」の生み出したものとは考えにくいのである。漱石にとって俳句や漢詩が何であったかは、むしろその作品自体を考察することを、より重視する必要があろう。

C・瀕死体験の考察

「忘るべからず八月二十四日」漱石は、五度にわたってこの言葉を繰り返している。これは「思い出す事など」という随筆にドラマとしての性格も幾分与えている。その日を経験して、その結果として、それは忘れることので

きない日となったのではあるが、漱石の筆は、単に終わってしまったことを振り返っているというにとどまらない。たとえば「忘るべからず二十四日の来るのを無意識に待っていた」のごとく、それが起こる前にこの言葉が使われていることに注意しなくてはなるまい。これはもちろん、文章上の技巧でもあろうが、人生において次に何が起こるのかわからない、ということを実感として感じたことをも伺わせるものである。明日何が起こるかわからない、それどころか今日、次の瞬間何が起こるのかわからないということを私達は、観念としては理解できても、実感として感ずることはほとんどないだろう。ただ、特別な経験をした人だけがそのような感慨をもち、人生の測り難さに身のすくむ思いをするであろう。漱石の瀕死体験を考える場合、第一に言えることは、そのことである。

漱石は胃潰瘍に苦しんでいたものの、これが死につながるなどとは思いもよらなかった。文字通り全く「無意識」であった。それにしても「無意識に待つ」とは矛盾した言葉である。「待つ」ことに「無意識」ということはないはずである。漱石はこの「待つ」にどんな思いを託したのだろうか——断定するほどの自信もないが、私は、そこに漱石の人間的時間に対する一つの洞察があると思う。端的に言えば、人間はすべて待っている存在だという捉え方である。「待つ」とは、今ここにないものを期待する心理であり、人間は本質的に「待って」生きている存在だという自覚である。私達は「意識」している場合にのみ「待つ」という言葉を使うが、人間存在は未来に投げ出されて生きているものであることを考えれば、意識せずとも「待っている」のが人間ではなかろうか。そして「意識」もせざることが起こるところにこそ機械ならぬ人間の「闇」があるとも言いうるのではなかろうか。その闇は、個人の意識を越えた巨大な暗闇である。

「余は一度死んだ。そうして死んだ事実を平生から想像通りに経験した。果して時間と空間を超越した。しかし、その超越した事が何の能力も意味さなかった。余は余の個性を失った。ただ失った事だけが明白なばかりであ

る。どうして幽霊となれよう。どうして自分より大きな意識と冥合できよう。臆病にしてかつ迷信強き余は、ただこの不可思議を他人に待つばかりである」

「三十分の死」――人事不省状態を経験し、あとになって、自分が死んでいたことを知った時の漱石の感想である。漱石がここで述べていることは、自分は死を経験したこと、そしてそれは意識を失ったという一事であって、それ以外の何ら不可思議な体験もなかったということである。それは残念なこと、悔しいこととして書かれている。漱石には早くからスピリチズムに対する深い関心があった。「思い出す事など」には、アンドリュ・ラングの「夢と幽霊」、フランマリオンの「霊妙なる心力」、オリヴァー・ロッヂの「死後の生」、マイエルやフェヒナー・ジームズなどが取りあげられている。それらはいずれも魂の不滅を説くスピリチズムであり、反合理主義・反知性主義の神秘思想である。漱石はそれを信じていたわけではなく、むしろこれらの思想について疑問を述べてもいる。しかし、疑問を持つことは、それを否定し、その思想を全く否定するということではない。むしろ疑問を持ちつつもそれに魅かれていたと言うべきである。「臆病にしてかつ迷信強き余」とあるがこれは謙遜であって、二十世紀に生まれた人間、しかも鋭い知性の人として、漱石は当然、容易にはスピリチズムに同感しなかった。スピリチズムの思想そのものが、個人の体験に依存するところが大きいのである。科学のように繰り返しのきく、実験可能な世界のことではない。漱石ならずとも合理的思索に慣れた人間なら誰しもうさんくさい目で見るであろう。しかし、だからと言って全くそれを受けつけないのと、にもかかわらず関心を抱き続けるのとでは大きな隔たりがある。スピリチズムに関心を寄せていた漱石は、自分の「死」というかけがえのない経験を通して、死が何か、経験として知りたかった。しかし意識の喪失、以外の何ものもなかった。「幽霊」になったわけでもなく「自分より大きな意識と冥合」したわけでもなかった。結局「この不可思議な他人を待つ」――疑いながらも他人の説くところ

を聞く――以外にはなかったのである。

それならば、この「三十分の死」体験は、漱石に何ももたらさなかったのであろうか。神秘的な体験などなかった、という意味ではその通りである。しかし、この体験を通して漱石は初めて死の深い淵を覗き込んだ、そしてそれ以後の死生観に大きな影響を与えたという点では、この体験、体験から生まれた思索は大きな意味を持っていると思う。その一つがジェームズの思想受容ということに表れている。すでに述べたようにジェームズの「多元的宇宙」に対する評価の大きな違いは、その間に「死」の経験をはさむことから生じたものだと思う。先程引用した文の中にある「自分より大きな意識」とはジェームズの思想から来るもので、漱石はジェームズの思想を次のように要約している。

「大いなるものは小さいものを含んで、その小さいものに気がついているが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己らの寄り集まって拵らえている全部に対しては風馬中の如く無頓着であるとは、ジェームズが意識の内容を解き放したり、また結び合せたりして得た結論である。それと同じく、個人全体の意識もまた大いなる意識の中に含まれながら、しかもその存在を自覚せずに、孤立する如くに考えているのだろうとは、彼がこの類推より下し来るスピリチズムに都合よき仮定である」（「十七」）

漱石はここでジェームズの思想に必ずしも共感していないようである。又自分の「死」の体験からも「自分より大きな意識」との冥合はなかったとは述べている。しかし、それにもかかわらずジェームズの思想への共感、もしくは親近感は強かったと思う。漱石は生を意識と考えた。その意識を断ち切られたということが、即ち死に他ならない。「三十分の死」とは、その意味である。意識の断絶、空無の経験をもった漱石は同時に又個人の意識は宇宙の意識に融合する、というジェームスの思想に深い親近感・魅力を覚えたのではなかろうか。比喩的に言えばジェ

ームスは、精神的には漱石と兄弟であった。それゆえに、その死を大きな驚きとして受けとめたのだと思う。ジェームズの死後、漱石は三たび「多元的宇宙」を取りあげて読んでいる。そして「自分の平生文学上に抱いている意見と、教授の哲学について主張する所の考えとが、親しい気脉を通じて彼此れ相倚るような心持がしたのを愉快に思った」と、その感想を述べている。それは単に文学上の意見にとどまらず意識というものに対する考えにおいて共通の点があったのではなかろうか。

漱石は助かった自分のありがたさを感じていることは前に述べた。しかし、同時にそのような自分を相対化してみている。いや自分だけではない。人間存在自体をこの「宇宙の歴史」の中において眺めようとする。大いなる宇宙の中で考えれば、助かって喜んでいる自分の姿など取るに足らぬ小さな事であり、うれしがるような何事もないと考えると、その喜びも、たちまち消え、「心細さ」「詰まらなさ」を感じたという。これは一種のニヒリズムである。このニヒリズムからの脱出、それは、この宇宙と自己とが融合するという観念ではないだろうか。その時人は、裸のまま、この宇宙に投げ出された存在ではなく、宇宙の光につつまれた存在だということを自覚するはずである。そこに救済の観念がある。漱石が、ジェームズの思想によって単純に救われたなどというつもりはない。ただジェームズの思想は、東洋の人、漱石の思想を以後導くものとなったのではないか。漱石の漢詩に見られる思想は、ジェームズの思想を抜きにしては考えられないと思う。おそらくその最初の発端は、あの大空、との融合体験にある。この時漱石は、自己の意識を失った一種の脱魂的な体験をしたようである。これは特種な神秘体験、瀕死体験からくるものではなく、一種の「気分」にすぎないとも解釈できるが、この「気分」は後々まで漱石の心の中に「幸福の記念」として響き続けたようである。そして、この体験こそ、ジェームズの言う宇宙との融合体験ではなかったかと私は思う。漱石自身はこの体験について「単に貧血の結果であったらしい」と遠慮がちに語っている

し、この特殊な体験で人間が一変したなどということもないだろう。だが単純にこれを幻覚として捨て去ることはできない。よし幻覚にせよ、この体験は、漱石の漢詩や晩年の思想に一種の影を落としているのではなかろうか。ただ、このような体験にどこまでも個執するのは、「科学」の時代に笑われるばかりだろうし「文学」の研究としても、さ程意味をもつまいとも思う。科学にしろ、文学にしろ、表現の世界のものであって「直接体験そのもの」を論ずることはできないのである。ただ私はここで、その体験を引用して、読者の判断に委ねたいと思う。

「余は当時十分と続けて人と話をする煩わしさを感じた。声となって耳に響く空気の波が心に伝って、平らかな気分をことさら騒つかせるように覚えた。口を閉じて黄金なりという古い言葉を思い出して、ただ仰向に寐ていた。ありがたい事に室の廂と、向うの三階の屋根の間に、青い空が見えた。その空が秋の露に洗われつつ次第に高くなる時節であった。余は黙ってこの空を見詰めるのを日課のようにした。何事もない、また何物もないこの大空は、その静かな影を傾けて悉く余の心に映じた。そうして余の心にも何事もなかった、また何物もなかった。透明な二つのものがぴたりと合った。合って自分に残るのは、縹緲とでも形容して可い気分であった。

その内穏かな心の隅が、何時か薄く暈されて、某所を照す意識の色が微かになった。すると、ヴェイルに似た靄が軽く前面に向って万遍なく展びて来た。そうして総体の意識が何処も彼処も希薄になった。それは普通の夢のように濃いものではなかった。尋常の自覚のように混雑したものでもなかった。またその中間に横わる重い影でもなかった。魂が身体を抜けるといっては既に語弊がある。霊が細かい神経の末端にまで行きわたって、泥で出来た肉体の内部を、軽く清くすると共に、官能の実覚から杳かに遠からしめた状態であった。余は余の周囲に何事が起りつつあるかを自覚した。同時にその自覚が窈窕として地の臭を帯び又一種特別のものであるという事を知った。床の下に水が廻って、自然と畳が浮き出すように、余の心は己の宿る身体と共に、蒲団から浮き上がった。より適当

にいえば、腰と肩と頭に触れる堅い蒲団が何処かへ行ってしまったのに、心と身体は元の位置に安く漂っていた。発作前に起るドストイェフスキーの歓喜は、瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭しても然るべき性質のものかと聞いている。余のそれはさように強烈のものではなかった。むしろ恍惚として幽かな趣を生活面の全部に軽くかつ深く印し去ったのみであった。従って余にはドストイェフスキーの受けたような憂鬱性の反動が来なかった。余は朝からしばしばこの状態に入った。午過にもよくこの蕩漾を味った。そうして覚めたときは何時でもその楽しい記憶を抱いて幸福の記念とした位であった。」

D・生の喜び——再生の感懐

八月二十四日の三十分の死を経験した漱石は、文字通り生き返った者の幸福に満たされている。九月七日から書かれた日記は生まれかわった漱石の感懐である。九月十六日の日記に言う「年四十にして初めて赤子の心を得たり」と。赤子のように素直で、無邪気な喜びに溢れた心——それは病に苦しみ、精神の葛藤を味わいつくしてきた漱石にとって、一挙にその苦悩を解決するような「手術」にもあたるようなものであった。大いなる病には、単に科学的にこういうわけでこういう病になったというばかりでなく、人生上の意味があるものだと私は思う。又、その病に「意味」を与えねばやまぬのが人間だとも思う。漱石にとって修善寺大患のもつ意味は、この大患を通して、生まれ変ったこと、再生したという点にもある。その生の喜びは四つの内容から成り立っている。

第一に、奇跡的に生き返った、その自覚からくる喜びである。漱石は、病床にあってしばしばドストエフスキーの体験に思いを馳せている。ドストエフスキーは銃殺刑が実行されようとする、その寸前に刑の執行が中止された経験をもっている。あと数秒で射殺されようとする、その寸前に助かった（実は、この刑が最初からそのように仕組まれた芝居であったのだが、当人は知る由もない）。そこに死にかけた、そして、そのまま死んでいたかもしれ

ぬ漱石の体験との共通性がある。漱石は次のように言う。

「余は自然の手に罹って死のうとした。現に少しの間死んでいた。後から当時の記憶を呼び起こした上、なお所々の穴へ、妻から聞いた顚末を埋めて、始めて全く出来上がる構図を振り返ってみると、いわゆる慄然という感じに打たなければ已まなかった。その恐ろしさに比例して、九仞(きゅうじん)に失った命を一箇(いっき)に取り留(と)める嬉しさはまた特別であった。この死この生に伴う恐ろしさと嬉しさが紙の裏表の如く重なったため、余は連想上常にドストイェフスキーを思い出したのである。」(「二十一」)

九死に一生を得て命あることの喜び――それは文字通り、命あること、それがそのまま喜びであり、ドストエフスキーがその幸福を忘れなかったように、自分も又、一生忘れまいと思う。しかし又「生き返ったわが嬉しさが日に日にわれを遠ざかって行く。あの嬉しさが始終わが傍にあるならば」と感じるのは、漱石ならずとも多くの人の常である。人間は、どんな素晴らしいことも忘れてしまう存在である。であればこそ、なお一層のこと、その喜びは書き記しておかねばならなかったのである。

第二に、生まれかわった漱石は、人々の好意、人間の善意というものを深く感じる。これが明るい気分、生きていることの嬉しさをしみじみと感じさせることになる。ここにはあの「行人」の一郎にみるような、自我を絶対視する傲慢な懐疑主義者の面影――それは、漱石の一面であろう――すらない。

「医師は職業である。看護婦も職業である。礼も取れば報酬も受ける。ただで世話をしていないことは勿論である。彼らを以て、単に金銭を得るが故に、その義務に忠実なるのみと解釈すれば、まことに器械的で、実もふたもない話である。けれども彼らの義務の中に半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透かして見たら、彼らの所作がどれほど尊くなるか分らない。病人は彼らのもたらす一点の好意によって、急に生きて来るからである。余

は当時そう解釈して独りで嬉しかった。そう解釈された医師や看護婦は嬉しかろうと思う。」（「二十三」）

ここで漱石は「好意」と「義務」を対比させて使っている。人間の行為を見る時、それが純粋の「好意」なのか、金を支払った代りの「義務」であるのか、懐疑家である漱石は、世の多くの人がつきつめて考えようとしない問題にきわめて敏感であり、意識的であった。その結果は、この世に「好意」――純粋の愛情と言いかえていいだろう――は少ない、人間はエゴイストであり、互いに相戦う存在だ、という認識である。人間社会は一見して平和に見えようと、それは土俵上の力士ががっぷり四つに組んで、すきあらば相手を倒そうと構えている、見かけ上の平和に過ぎず、その実態は倒すか倒されるかのすさまじい生存競争に他ならない、というのが、漱石の人間観であった。このような人間観から生まれるのは、この人生の生き難さであり、人生を苦とみるペシミステックな暗い感情である。「余は好意の干からびた社会に存在する自分をはなはだぎこちなく感じた」漱石は、このフレーズを五度にわたって繰り返す。それはあたかも胃潰瘍が吐血という形で一つの頂点を迎えたように、精神の苦渋が「ぎこちなさ」のあまり、どうにもならない状態にまで達して脱出口を求めていたかのごとくである。そして吐血――それによる死と再生は、確かに天の与えた一つの解決であった。病に陥って徹底的に無力になった時、漱石は初めて人間の好意というものを自覚し、素直な、謙虚な心を抱く。九月八日の日記に言う「自然淘汰に逆らう療治。小児の撫育より手がかかる。半白の人果たしてこの看護を受くる価値ありや。われより言えば死にたくなし。ただ勿体なし」と。

人間の「好意」を信じて生きる者は、幸福な者である。しかし、それは時として「お人好し」と言われ「おめでたい人」と言われ、だまされ、失敗することもあろう。私達は、そのような失敗をしないように幼いころから、人間を信じきってはいけないことを教えられる。子供にとって大人は「誘拐犯」であり、女にとって男は「狼」である。この世の無数の犯罪は、人間がどんなに信用のならない悪人であるかを歴然と示している。そして「犯人」は

必ずしも自分とかけ離れたところにのみいるとは限らないだろう。それどころか、この自分でさえ、時として他者に対する「犯人」であるかもしれないのである。人間は、信じうる存在なのか否か。これは恐らく漱石文学の中に深々と横たわっている根本的な問いの一つであろう。漱石自身が、この信と不信の間で苦しんでいたに違いない。ある時期の漱石の人間不信——具体的に言えば、妻への不信は、もはや狂気に近い。このことについては、詳述するゆとりをもたない。ただ、ここで改めて確認しておきたいことは、漱石は、病のために無力になることによって、恐らく、その生涯で初めてと言っていい程の、人間への信頼を感じ、人々の「好意」に支えられて生きる自分を幸福と感じた、という一事である。

第三に、その自然観照の喜びである。瀕死状態から生き返って漱石は、修善寺の豊かな自然を清新な目で、生き返った者の目で眺め始める。俳句は、病中というゆとりと余裕の境涯から自然に生まれてきた、とは漱石自ら語るところであるが、必ずしも病が、そのまま、そのような心境をもたらすわけではない。もし、そうであるとするなら、多病であった漱石は、それゆえの幸福を多く味わったということになる。しかし、苦悩の日々を送っている漱石にとって、病ゆえの幸福とは、この修善寺大患の時だけのものではなかったかと思われる。問題は、なぜ修善寺大患が漱石にとっては、幸福感をもたらす程の体験であったかという点である。それは、これまであげた「死」の体験自体が、以後の生の受け止め方に大きな変化を与えたということである。自然観照の喜びも、それと深くかかわっている。修善寺という、東京でのわずらわしい人間関係から離れた静かな環境、恵まれた自然環境は、生き返った漱石の目にしみじみと映じ耳に響く——そこには、生き返ったものの新鮮な心がある。繰り返しになるが、病んだから俳句が生まれるのではない。死を経験し、そして又、修善寺という環境にいたから句は生まれてくるのだ、と私には見える。漱石の語ることを鵜のみにして単純に、病こそ自由であり、そこから詩が生まれる、とは考

えられないのである。修善寺にいる間に漱石は七十余りの俳句を作っているが、それは自然観照と病者の感懐を中心とするものであり、両者の結びついたものも多い。たとえば、「病んでより白萩に露の繁く降る事よ」「虫遠近病む夜ぞ静なる心」「生き返るわれ嬉しさよ菊の秋」など、特に最後の句などには生き返ったことが、そのまま自然に触れる喜びに直結している事情が端的に伺われよう。それは俳句として必ずしも秀れたものではないが――それは「思い出す事など」に取られたものがわずか十三句しかないということでも証明されていよう――多くの句が作られた背景には、漱石の喜びにみちた新鮮な心があると思う。漱石自身は俳句と漢詩を同列に扱って、共に作の出来ばえなどに関係のない、自由なゆとりの境地から生まれでた、幸福の記念だと述べているが、両者には一律に扱えない違いがある。その一つが、自然観照の善びであり、これは主として俳句という形を借りて表現されているということである。「思い出す事など」は、それを子供の時に見た南画をもって説明している。自然を好んで描いた南画に漱石は強く引かれているが、修善寺で「南画」的世界を経験したのである。「南画に似た心持は時々夢を襲った。ことに病気になって仰向けに寝てからは、絶えず美しい雲と空が胸に描かれた」「それ位病中の余は自然を懐しく思っていた」（「二十四」）と述べ、空を見る幸い、草花を見る喜びについて語っている。

第四に、食事の旨さである。人事不省に陥った後の漱石は、しだいに健康を取り戻し、体力を回復していく。病とは言え、悪化していく病と、危機を脱して回復に向かっていく病とでは大きな意識の違いがあろう。漱石が病を一つの幸福な境地として受け止めることができた背景には、落ちる所まで落ちて、そこから立ち直っていく、回復に向かっていく病であったということが背景にある。それが端的に示されるのが食事についての感想である。食事は病人ならずとも、あらゆる人にとって大きな関心事であり、食事を旨くとれるのは人生の楽しみの一つであろう。又食事を旨いと感ずるのは健康であることの証しにもなる。まして、胃潰瘍による吐血、それに続くほとんど

絶食に近い日々を経て、次第に、普通の食事へと戻っていく過程である。とるに足りないようなささいな食事を漱石は大きな喜びをもって受けとめている。たとえば「平野水」（炭酸水）を飲んだ時の感想を次のように書いている。「平野水がくんくんと音を立てるような勢いで、食道から胃へ落ちて行く時の心持は痛快であった。けれども咽喉を通り越すや否やすぐとまた飲みたくなった。余は夜半にしばしば看護婦から平野水を洋盃に注いでもらって、それをありがたそうに飲んだ当時を能く記憶している」。（「二十六」）続いて粥を食べた時「こんな旨いものが世にあるのかと疑いつつ舌を鳴らした」と言い、「それからオートミールが来た。ソーダビスケットが来た。余は凡てをありがたく食った。そうして、より多く食いたいという事を日課のように繰り返して森成さんに訴えた。森成さんはしまいに余の病に近づくのを恐れた。東君はわざわざ妻の所へ行って、先生はあんな尤もな顔をしているくせに、子供のように始終食物の話ばかりしていて可笑しいと告げた」（「二十六」）と述べている。回復に向かっていく漱石の明るい姿がここに伺われる。

腸（はらわた）に春滴（したた）るや粥の味　この句は、これまで述べた食事の旨さ――生きること、再生の深い感激がこめられている。「思い出す事など」の「二十六」で書かれたこれまでの叙述は、すべてこの一句にこめられていると言っても過言ではあるまい。この句だけ知って単純に粥の味をかみしめているとのみ解していた私は、この句が大患の瀕死体験から生き返った漱石の句だということを知った時、改めてこの句のもつ重みを感ぜざるをえなかったのである。

E・第二の葬式とアイロニーの問題――再び現実へ

「思い出す事など」の結びは二つある。即ち「三十二」と「三十三」である。前者は、修善寺を発って東京に向かう時の思い出、感慨であり、後者は長与病院を退院して自宅に戻っている時、病院にいたころのことを思い出し

て、その感慨を書いたものである。結びに二つの文章を書くということは一般にはなく、漱石は初め前者だけのつもりだったのであろう。明治四十三年十月二十九日から始めて四十四年二月二十日まで約四ケ月の間に三十二回を断続的に掲載、「三十二」はその結びであり、修善寺体験はここで締め括られたのであったが、二ケ月近く経った四月十三日「病院の春」として、長与病院で正月を迎えた時のことを思い出して現在の感慨を述べたのである。そしてこの二つの結びは共に、「思い出」の世界から、現実の世界に帰っていく漱石の心境を述べた大切な文章だと思われる。

まず前者からみてみよう。漱石が修善寺を発ったのは十月十一日である。その日の日記の一節を紹介しておこう。「いよいよ帰る日也。雨濛々。人々天を仰ぐ。荷拵出来。九時出立のはず。甘鯛の頭付にて粥二碗、オートミール一碗をしたたむ。雨の中を馬車にのる。人の考案にて櫓の如きものにて二階を下る。それを馬車の中へ入れる。浴客皆出見る。櫓は白布で蔽わる。わが第一の葬式の如し。雨の中を大仁に至る。二日目にて始めて戸外の景色を見る。雨ながら楽し。目に入るもの皆新なり、稲の色尤も目を惹く。竹・松山・岩・木槿・蕎麦・柿・薄曼珠沙華・射干・悉く愉快なり。山々僅かに紅葉す。秋になってまた来たしと願う。（以下略）」

東京に帰る日のにぎわいぶりが伺われ、漱石の弾む心が自ずとにじみ出ている。「わが第一の葬式の如し」とあるが、これは単純な見立て上の比喩であって特別に重い意味を持つものではない。「雨ながら楽し」「目に入るもの皆新なり」「悉く愉快なり」と明るい気持ちで修善寺を発ったことがわかる。「三十二」はこの日記をもとに書いたわけだが、一つの明らかな違いがある。それは「第一の葬式」が「第二の葬式」となっていることである。即ち次のように書かれている。

「人は余を運搬する目的を以て、一種妙なものを拵(こし)らえて、それを座敷の中に舁(か)き入れた。長さは六尺もあった

ろう。幅は僅か二尺足らない位狭かった。その一部は畳を離れて一尺ほどの高さまで上に反り返るように工夫してあった。そうして全部を白い布で捲いた。余は抱かれて、この高く反った前方に脊を託して、平たい方に足を長く横たえた時、これは葬式だなと思った。生きたものに葬式という言葉は穏当でないが、この白い布で包んだ寐台とも寐棺とも片の付かないものの上に横になった人は、生きながら葬われるとしか余には受け取れなかった。余は口の中で、第二の葬式という言葉をしきりに繰り返した。人の一度は必ず遣ってもらう葬式を、余だけはどうしても二返執行しなければ済まないと思ったからである」

「第一」が「第二」となっているのはなぜだろうか。単なる誤植であろうか。それとも何かそこに意味があるのだろうか。この点に関して佐藤泰正は『『第一の葬式』とは何か。それはあの『三十分の死』とそこからの蘇生のみ指すものか」と言い「その志向する処がこれから迎える現実との新たな戦いにあることは『第二の』という一語にもあざやかであり……」と述べている。佐藤の見解は必ずしも明確なものではないが「第一の葬式」を「三十分の死」を経験した時のこと、そして「第二の葬式」を今こうして寝台とも寝棺ともつかないようなもので運ばれている姿、と見ているように感ぜられる。ただ、その場合「現実との新たな戦い」というのがはっきりしない。

私は次のように考えている。即ち、「第二の葬式」とは、自分にとってこれから必ず訪れる最後の葬式であり、それに対する「第一の葬式」とは、修善寺大患における「三十分の死」の社会的又、象徴的儀式ではないか。死を経験した漱石は、修善寺を出る時、「葬式」をしたと受けとったのではないだろうか。現に修善寺を出る時、死者として棺に寝かせられて運び出される可能性の方が高かった漱石である。奇跡的に命をとどめた漱石は、修善寺を運び出される時、その形の類似から死の影を担った已れを想像した。そして現実にはこれから生きていくにせよ、それは「第二の葬式」までの「生」と考えたのではなかろうか。この辺の事情を少しつきつめて考えてみよう。

「人の一度は必ず遺ってもらう葬式を、余だけはどうしても二返執行しなければ済まないと思った」――その二返目は間違いなく、次の確実な死であり、日記に「第一の葬式」と書いた時点で、それはもはや漱石の頭にあったはずである。「第一」は当然「第二」を意識して書かれるからである。しかし、日記は、外見から来る単なる直観的な言い方に過ぎなかった。それに対し「思い出す事など」における「葬式」の意味は深く象徴的な意味を担っている。改めて筆をとり直した漱石は、ここで己れの生を死から生き返った生、そして再び死へと向かう生という形で捉え直したのではなかろうか。その点から言えば「思い出す事など」は単なる「思い出」ではなく現在の漱石の人生認識が反映している。

生き返ったとは言っても、漱石はもはや十分に老いていた。それは四十三才という年齢を言うのではない。老いの意識の深まり、という点で言うのである。俗説に、人間は自分を年寄りだと自覚した瞬間に老いるのだ、と言う。私には、これは老いを精神的に受容しようとしない強がりのようにも感ぜられるが、漱石の意識は老いに――そして、その果てにある死へと深く傾斜している。それは、漢詩にも伺われるものであったが、「思い出す事など」の次のような一節にも暗示的な問いかけの形で表出されているものでもある。

「病の癒えた今日の余は、病中の余を引き延ばした心に活きているのだろうか、又は友人と食卓に就いた病気前の若さに立ち戻っているのだろうか。果してスチーヴンソンのいった通りを歩く気だろうか、または中年に死んだ彼の言葉を否定して漸く老境に進むつもりだろうか――白髪と人生の間に迷うものは若い人たちから見たら可笑しいに違いない。けれども彼ら若い人たちにもやがて墓と浮世の間に立って去就を決しかねる時期が来るだろう」（「三十一」）

ここで言う「スチーヴンソンの言った通り」というのは「人はいくら年を取っても、少年の時と同じような性情

を失わない」というイギリスの作家スチーヴンソンの考えを指している。それは、人間は幾つになっても気持ちの若さを失わないものだという考えであるが、それに対して漱石は「スチーヴンソンの言葉も尤もと受けて、今日まで世を経たようなものの、外部から萌して来る老頽の兆候を幾茎かの白髪に認めて、健康の常時とは心意の趣を異にする病裡の鏡に臨んだ刹那の感情には、若い影は更に射さなかった」と自らの意識をふり返りつつ疑問を投げかけている。生き返った漱石は、若々しい青年の心を抱いていたのではなく、「白髪」と「老い」の意識、つまりは深い「老い」と「死」の意識を抱いていたのである。この時、青春は、はるか昔、夢のように遠ざかった過去として思い出されたのはごく自然のことである。「桃花馬上　少年の時　笑って銀鞍に拠りて柳枝を払う　緑水今に至って迢遞と去り　月明　来たりて照らす鬢　糸の如きを」（吉川幸次郎訳）はそのような漱石の心境を漢詩に託したものである。ここにあるのは病を一つの自由と考え、それを楽しむ東洋の詩人風の境涯ではないことは明らかである。「第一の葬式」を「第二の葬式」と書き直した――わずか一本の線を線を加えたに過ぎないが、そこには意識の決定的と言ってよい違いがある。「第二の葬式」と書いた時、漱石は、それが決して遠い先のものではないことを意識していたに違いない。同時に、それは修善寺において死んだ自分が、現実に向かっていく、この社会に出て生きていく時の心の構えでもあった。

アイロニーの問題に移ろう。この言葉は「三十三」に三度出てくるもので、修善寺大患を総括する鍵となる言葉であり、そこに漱石は生の苦い実感をこめている。文脈に即してこれを考えてみよう。

「除夜の夢は例年の通り枕の上に落ちた。こういう大患に罹った挙句、病院の人となって幾つの月を重ねた末、雑煮までここで祝うのかと考えると、頭の中にはアイロニーという羅馬字（ローマじ）が明らかに綴られて見える。それにもかかわらず、感に堪えぬ趣は少しも胸を刺さず、四十四年の春は自ずから南向の縁から明け放れた。そうして町井さ

んの予言の通り形ばかりとはいいながら、小さい一切の餅が元旦らしく病人の眸(ひとみ)に映じた。余はこの一碗の雑煮に自家頭上を照すある意義を認めながら、しかも何らの詩味をも感ぜずに、小さな餅の片を平凡にかつ一口に、ぐいと食ってしまった」

こんな風に文章を書き写してみて改めて感じるのは、漱石という人が実に巧妙な文章の書き手であるということに対する今更ながらの感嘆である。随筆という最も親しみやすい、平凡なジャンル、日常の感懐を盛る文章は、それだけに、詩味の欠けた奥行のないものになりがちである。しかし、ここには一つの「詩」がある。その「詩」は、喜びから生まれているのでも感激から生まれているのでもない。

アイロニーという言葉は、「広辞苑」によれば「①皮肉、②元来、偽装、仮装、ごまかしの意。転じて、真の認識に達するためにソクラテスの用いた問答法。」とあり「新国語辞典」(角川書店)には「①反語(法)②皮肉、風刺」と記されている。これらの説明はいずれもこの文章を理解するのにほとんど役に立たないものであり、すぐれた英文学者でもあった漱石は、この語に一般の日本人の必ずしも理解できない意味をこめて使っている。そこでロングマンの英英辞典にあたってみると、「アイロニー(irony)」は次のように説明されている。

1 use of words which are clearly opposite to one's meaning, usually either in order to be amusing or to show annoyance

2 a course of events or a condition which has the opposite result from what is expected, ususlly a bad result

一般に「皮肉、反語」というのは1の意味だが、漱石がここで使っているのは2の意味に近い。思いもかけぬ死の経験、奇跡的な生還、再び同じ病院の人となり、正月をそこで祝ったということ、その一つ一つが何一つ自分の

意図から発したものではない。人生の不条理、測り難さに対する深い感慨がそこにこめられている。助かった自分を本来ならば喜ぶべきであろうが、もはやその喜びもない。あれ程旨かった食事も今は味けない平凡事、日常茶飯事にすぎない。ここには病の世界から現実の世界に戻った漱石の、覚めた冷ややかな感慨しかない。

「余はこれらの人（長与病院で亡くなった人々を指す。筆者注）と、一つ屋根の下に寝て、一つ賄の給仕を受けて、同じく一つ春を迎えたのである。退院後一カ月余の今日になって、過去を一攫にして、眼の前に並べて見ると、アイロニーの一語は益鮮やかに頭の中に拈出（ねんしゅつ）される。そうして何時の間にかこのアイロニーに一種の実感が伴って、両つのものが互に纏綿（てんめん）として来た。鼬の町井さん（看護婦で、親しくなって鼬と渾名をつけたもの。筆者注）も、梅の花も支那水仙も、雑煮も――あらゆる尋常の景趣は悉く消えたのに、ただ当時の自分と今の自分の対照だけがはっきりと残るためだろうか」

「思い出す事など」は、この独り言の呟きのような感慨をもって閉じられる。同じ長与病院で亡くなった幾人かの人があり、助かって再び「この広い世界」の人となった自分がある。病院で見た様々のものは遠く消え去って、ただ「当時の自分」（入院中の自分）と「今の自分」（助かってこうして今この文章を書いている自分）との「対照」――生と死の「対照」ばかりが鮮やかに意識にのぼってくる。長与病院での思い出が、はるかかなたの出来事のように感ぜられた漱石に、修善寺の思い出はなお更、遠いものであった。思い出をかみしめるようにして書き続けてきたものの、思い出は人間を支えるにはあまりにも力弱い。病の至福も、生の喜びも、もはやはるかかなたの思い出と化し、「第二の葬式」までの生を生きている自分がある。「老い」と「死」の自覚のうちに生きている自分がある。ギリギリにつきつめていって修善寺大患が何であったか、いや何であるのか、という時、それは生と死のアイロニーに対する深い自覚であったと私は考える。それは、人間存在の不条理、虚無、頼みがたさに対する深

い感慨と言ってもよいだろう。アイロニーの一語で、「思い出す事など」を締め括った漱石の感慨の深さは、おそらく余人の容易には理解しえぬものであり、そこにこの一見、平易、平凡とも見える随筆の単に「思い出」を書き綴ったと誤解され、通俗的にしか解釈されかねない要因もある。

書くことは、越えることだと私は考えるが、特に漱石という作家は本質的にそのような作家であった。その作品の豊かさ多様性、わずか十年の間の、あれ程の作品の変貌ぶりはそれを証明してもいよう。同様にして思い出すことを書き終えた時、漱石はもはや思い出に生きてはいない。思い出は越えられているのである。その初めにおいて「薄ぼけて微かに遠きに行くわが記憶の影を眺めては、寝ながらそれを呼び返したいような気がした」と書き「病気の経過」とそれにつれて起こる「内面の生活」を書き記そうとして書き続けてきたその筆は、もはや思い出とは呼べぬ深みに達し、解き得ぬ謎の前で呟きをもらしているのである。そのような目で今一度、この作品を眺め直してみると、「思い出す事など」という随筆の一つの性格として、回を追うごとに時間的な契機のもたらす認識の深まり、意識の深まりが伺える、ということが指摘できるのではなかろうか。思い出を懐しみ、思い出を掘り起こしつつ書き始められたこの随想は、結果として思い出の世界を越えてしまった。結果から言えば、そして逆説的に言えば、思い出は漱石にとって、越えられるためのものであったということになる。日記との違いがそこにもある。日記は、その日その日の覚えであり、感想にすぎなかった。それに対して「思い出す事など」は一貫した創作意識に立ってテーマを追求していったところに生まれた作品である。そこに小説家としての方法意識の自らなる反映もある。小説に筋があり、その筋を通してテーマが浮かびあがってくるように、「思い出す事など」も、単に思い出の雑然たる寄せ集めではなく、時間的な契機のもとに秩序だてられテーマを深化させ、時としてドラマの要素も盛

り込みながら書きつがれていった。その意味では、これを一種の私小説のようにも読めないわけでもない。少なくとも志賀直哉の「城の崎にて」を小説とするなら、これも一編の小説なのである。ジャンル分けにこだわるわけではないが、一般に日本では、小説ばかりが多く評価され読まれているような気がしてならない。小説の魅力は空想の翼を存分にはばたかせるところにあるが、作家の思想を探るには随筆の方が直截であってつかみやすいものである。漱石についての研究も本人の書いた作品をこえる膨大な分量の研究書が書かれてきた。しかし「思い出す事など」のような地味な随筆について、分析的に採りあげているものはさ程多くないようである。やや細かすぎる冗漫にわたった部分もあろうが、その言葉に即して考え、解釈をぶつけあう、というのが作品研究の原点だと私は考えている。以上書き記してきたことは、そのような立場からの「思い出す事など」の研究であり、漱石の修善寺大患をめぐっての考察である。修善寺大患で「生き返った」漱石が以後、その人生を終えるまで、どのように生き考え、創作し続けたのか、又、この「生き返った」経験が、どのような形でそこに反響し続けたのか、それを今後の課題として結びの言葉としたい。

参考文献

漱石全集　岩波書店（文庫も含む）
夏目鏡子述　松岡譲筆録　「漱石の思い出」　角川文庫
佐藤泰正　「夏目漱石論」　筑摩書房
毛利孝一　「生と死の境」　東書選書
江藤　淳　「夏目漱石」　新潮文庫
中村　宏　「漱石漢詩の世界」　第一書房
河合隼雄　「宗教と科学の接点」　岩波書店
レイモンド・A・ムーディ　「かいまみた死後の世界」　評論社
マイクル・B・セイボム　「あの世からの帰還」　日本教文社